博　多　123

— 博多遺跡群第165次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書993集

2008
福岡市教育委員会

博　多　123

— 博多遺跡群第165次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書993集

遺跡略号　HKT－165
調査番号　0642

2008
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは行政に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する博多遺跡群の発掘調査報告書は共同住宅建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では中世から近世の集落を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2008年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田裕嗣

例言

□本報告書は博多区古門戸町50、51、52番の共同住宅建設に伴って2006年9月7日から12月18日にかけて発掘調査を行った博多遺跡群第165次調査の報告書である。
□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
□遺構実測は藤野雅基と池田祐司、加藤隆也、木下博文、森本幹彦、屋山が、遺構の写真撮影は屋山が、遺物実測は米倉秀紀、平川敬治、山崎賀代子、濱石正子、屋山が、製図は熊谷幸重、星野恵美、池田祐司、屋山が担当した。
□銅銭のX線写真、分類は福岡市埋蔵文化財センターの片田雅樹が担当した。
□遺構・遺物番号はそれぞれ通し番号とした。
□本書に関わる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
□貿易陶磁の分類は大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－（2000年）太宰府市教育委員会を参照した。

遺跡調査番号	0642	遺跡番号	020121	分布地図番号	天神49
調査地地番	福岡市博多区古門戸町50、51、52番				
開発面積	347㎡	調査面積	390㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	20060907 ～ 20061218			担当者	屋山　洋

本文目次

Ⅰ. はじめに …… 1
Ⅱ. 調査の記録 …… 4
1. 調査の概要 …… 4
2. 各調査面の概要 …… 4
3. 遺構と遺物 …… 5
4. 小結 …… 43
5. 博多遺跡群第165次出土銭について …… 45

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図 …… 2
第2図　調査地点位置図 …… 3
第3図　調査区周辺図 …… 3
第4図　調査区1面・2面全体図 …… 折り込み
第5図　調査区3面全体図・北側壁面土層図 …… 折り込み
第6図　溝出土遺物実測図1 …… 10
第7図　溝出土遺物実測図2 …… 11
第8図　SK3359・3388・3390遺構実測図 …… 13
第9図　SK3359・3388・3390出土遺物実測図 …… 14
第10図　土坑実測図1 …… 18
第11図　土坑実測図2 …… 19
第12図　土坑実測図3 …… 20
第13図　土坑実測図4 …… 22
第14図　土坑実測図5 …… 24
第15図　土坑出土遺物実測図1 …… 27
第16図　土坑出土遺物実測図2 …… 28
第17図　土坑出土遺物実測図3 …… 29
第18図　SK3427・SB01実測図 …… 30
第19図　廃棄・祭祀遺構実測図 …… 31
第20図　土師皿出土遺構実測図 …… 32
第21図　土師坏・皿実測図 …… 33
第22図　井戸遺構実測図 …… 35
第23図　井戸出土遺物実測図 …… 36
第24図　金付着白磁碗実測図 …… 38
第25図　鉄製品実測図 …… 39
第26図　金属器・骨角器・素材実測図 …… 40
第27図　石製品実測図 …… 41
第28図　第3面全体図 …… 44

表目次

PL1　博多165次出土墨書土器 …… 37
PL2　鉄製品X線写真 …… 39
PL3　出土銭一覧1 …… 47
PL4　出土銭一覧2 …… 48
表1　博多165次出土墨書土器一覧 …… 38
表2　金付着白磁碗成分分析表 …… 38
表3　出土線一覧 …… 45
表4　遺跡別出土銭一覧 …… 45

図版目次

図版1　1. Ⅰ区1面　2. Ⅰ区2面　3. Ⅰ区3面　4. Ⅱ区1面東半　5. Ⅱ区2面　6. Ⅱ区3面　7. Ⅱ・Ⅲ面南側
8. Ⅰ区3面
図版2　1. SD1004　2. SD1098　3. Ⅰ区2面溝検出状況　4. SD2191　5. SD3141　6. 北側溝土層
7. SD3456・3272・3252
図版3　1. Ⅲ区3面北側　2. Ⅲ区道路に直交する小溝と柱穴群　3. SD3490　4.SD3352
図版4　1. Ⅱ区2面道路A　2. Ⅱ区2面道路A
図版5　1. Ⅰ区東南隅道路面　2. Ⅰ区東南隅道路面　3. Ⅱ区道路面B　4. Ⅱ区道路面C　5. 3483遺物出土状況
図版6　1. SK3449　2. SK2035・2046　3. SK2061炉　4. SK2097　5. SK2187　6. SK2187・209土層　7. SK3029
8. SK3034・3035土層
図版7　1. SK3036土層　2. SK3103　3. SK3135　4. SK3236　5. SK3236土層　6. SK3251　7. SK3251土層
8. SK3345土層
図版8　1. SK3426　2. SK3427　3. SE2005　4. SE2052　5. SE2057　6. SE2052検出状況　7. SE3012
8. SE3204・3205
図版9　1. SK3249　2. SK3359　3. SK3388　4. SK3390　5. SK3421　6. SK3468　7. SP2018　8. SP2041
図版10　1. SK1008アカニシ・アワビ出土状況　2. SK1008鯨類上腕骨出土状況　3. SK　マグロ類椎骨出土状況
4. SK3036イノシシ頭部吻部　5. SK2124　6. SK2051大型魚骨出土状況　7. SK2043遺物出土状況
8. SK2043　アワビ出土状況
図版11　1. SK2055下層獣骨出土状況　2. SK2055アワビ・イヌ頭骨　3. SK2055イガイとイルカ類下顎
4. SK2055イルカ類椎骨出土状況　5. SK2055イルカ頭骨　6. SK2055マグロ類最終尾椎
7. SK2055マグロ類尾鰭　8. SK2055小型魚類骨出土状況
図版12　1. Ⅰ区南壁土層　2. Ⅰ区東壁土層　3.Ⅱ区ベルト中央土層　4. Ⅱ区ベルト北端　5. Ⅱ区中央ベルト道路土層拡大
6. Ⅱ区中央ベルト南側　7. 金付着白磁　8. 大型魚類歯骨

Ⅰ.はじめに

1. 調査に至る経過

平成18年（2006年）2月2日付で株式会社クレ・コーポレーション代表取締役樽林大平氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財課に福岡市博多区古門戸町50、51、52番の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（17－2－1049）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である博多遺跡群の中に位置しており、周辺の発掘調査でも鎌倉時代から江戸時代を中心とする貿易都市であった博多の集落遺構が確認されている。申請地においても遺構の存在が予想されたため、試掘調査による遺構の有無の確認が必要と判断し、2月23日に重機を使用して試掘調査を行った。結果は現地表面から260㎝の深さで基盤である砂丘面に達するが、その上層でこまかな整地層と遺構を確認した。試掘結果によると、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため、建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存を測ることで両者の合意が成立した。以上の協議をうけて平成18年（2006年）9月から発掘調査を行うこととなり、実際には平成18年（2006年）9月7日から12月18日の期間で発掘調査を行った。調査中はクレ・コーポレーションからユニットハウス、水道などを提供していただきました。記して謝意を表します。

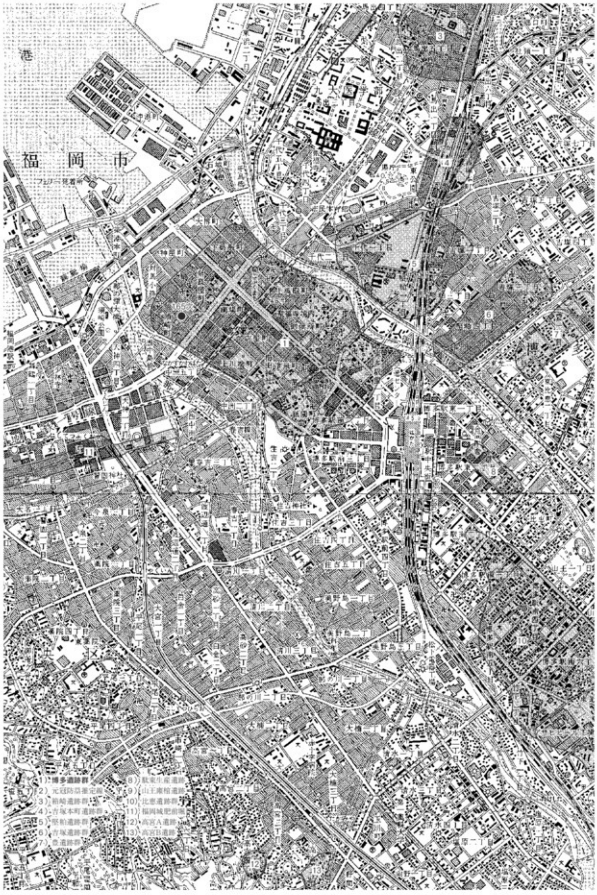
2. 調査の組織

調査主体　教育委員会文化財部埋蔵文化財1課
埋蔵文化財1課課長　　山口譲治
　　調査係長　　（前）山崎龍雄　（現）米倉秀紀
　　調査庶務　　鈴木由喜（文化財整備課）
　　調査担当　　屋山　洋

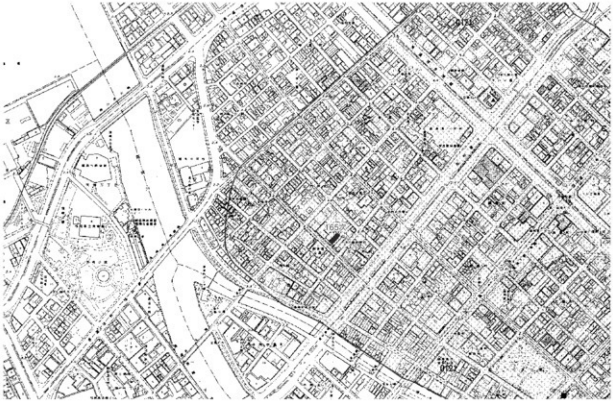
作業員　　石田和子　乾俊夫　岩本三重子　上野道朗　大塚正樹　岡部安正　金子由利子　乗野孝子
　　桑原美津子　古賀昌美　斎藤純子　柴田勝子　柴田春代　堤正子　中島道夫　中村健三
　　西美由喜　吹春憲治　藤野雅基　前田佳代　水野由美子　吉沢恵
整理作業　大石加代子　熊谷幸重　中村麻依子　藤野洋子　村上恵子

3. 立地と環境

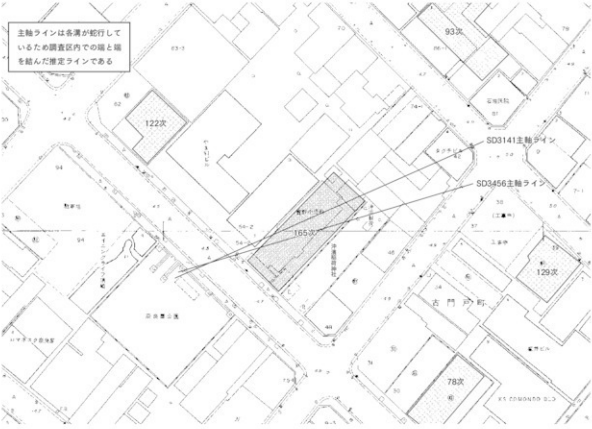
博多遺跡は那珂川によって運ばれた土砂によって形成された砂丘上に位置する。砂丘は大きく南北二つの砂丘に分かれるが、北側を古代の呼び名を元にして沖の濱、南側を便宜上博多濱と呼んでいる。今回の調査区が位置する沖ノ濱は博多濱に比べて砂丘の形成が遅れものの、12世紀前半には集落が形成されるようになったと思われる。13世紀後半に元寇防塁が築かれるとその南側で町が発達し、15世紀には博多濱に代わって大陸との交易の中心となる。今回調査を行った165次調査地点は沖ノ濱の西端部に位置しており、沖ノ濱の中心と考えられる現在の奈良屋小学校近辺からは若干離れている。周辺の調査では南側60mに位置する78次調査で12世紀後半の土壙墓と木棺墓が検出されている。墓の密度が他の地域に比べて高いことから、この周辺が墓として使用されていた可能性も言われているが、そのすぐ西側に位置する123次調査では井戸、土壙などの集落遺構が検出されており、集落と墓域が複雑に入り組んでいたと思われる。また、78次調査では16世紀になると大型掘立柱建物の礎石や石組み土坑が太閤町割り以前の町並みに沿って築かれる様になり、北側の122次調査区においても同様の石組みがみられることから妙楽寺関連建物があったと思われるが、今回の調査においては12世紀の土壙墓や木棺墓等の墓域も、16世紀の石組み遺構や大型掘立柱建物は確認することはできなかった。



第１図　周辺遺跡分布図(1/25,000)



第２図　調査地点位置図(1/8,000)



第３図　調査区周辺図(1/1000)

Ⅱ. 調査の記録

1. 調査の概要

敷地全体が調査対象となるため、ユニット・トイレなどの設置場所が問題となったが、原因者側の提供により調査区の西側に H 鋼と鋼板を組み合わせた台を造り、そこを休憩所や作業スペースとして利用することとなった。これによって、調査途中でユニットの移動を行う必要がなくなり、駐車スペースや土器洗いなどの作業スペースもできて便利になった反面、鋼板の下は光が入らないため暗くて遺構検出が十分にできないなどマイナス面も大きかった。今後同様の手法をとるためには採光などに工夫が必要と思われる。調査区は東西に長く、西側が道路に面する。調査は最初事前審査の試掘調査を基に現地表面から150cm掘取り、その後、東側から調査を行って廃土を西側に溜め、廃土が溜まると原因者が提供したダンプで搬出を行った。当初は調査区を東西に２分するつもりだったが、廃土置き場が計画より場所を取ったため、途中から Ⅰ～Ⅲ区の３分割とした。各区3面の調査とし、深さ70cm毎に調査面を設定した。調査面間の掘り下げは手作業による掘り下げとし、掘り下げ時に検出した遺構なども図化するようにしていたが、Ⅱ区は時間短縮のため小型重機を使用して掘り下げを行った。遺構は調査区中央で東西方向の道路と道路に並行、または直交する小規模な柱穴群や溝、土坑を確認した。14世紀中頃～後半には道路中央に井戸が掘られており、道路が一時的に廃絶か狭くなった可能性があるが、井戸が埋没した後にも道路と考えられる整地層があるため、14世紀末の井戸埋没後は再び道路として使用された。井戸からは鹿角製品の廃材や金が付着した白磁碗片（パレットとして使用か）出土しており、14世紀末頃近くに何らかの工房があったと思われる。この時期は妙楽寺が創建された時期であり、それに関連する施設である可能性も考えられる。15世紀以降の整理層中には厚い焼土ブロック整地層を約３枚含む。戦国末には博多は何度か戦乱に巻き込まれて灰燼に帰している。焼土ブロック整地層はそれらに関連する可能性があるが、各焼土ブロックがどれに相当するかは不明である。

2. 各調査面の概要

⑴第１面　試掘結果を基に現地表面から約1.5m下げた標高3.2mで調査面を設定した。調査面自体の時期は現在の地割りと方向が異なる溝が数条確認できたことと、14世紀後半の井戸が埋没した後の整地がみられることから15～16世紀の整地面と考えられる。この面で確認できた遺構は現地割りから約45°ずれる溝のSD1004が中世末まで遡るものの、近世～近代の攪乱が激しいため、中世に遡る土坑や井戸はほとんど検出できない状況であった。調査区西側半分に関しては特に近代の煉瓦建物基礎と土の搬出時の破壊が激しいことから、調査を中止した。

⑵第２面　第１面から70cm下げた標高2.5mを調査面として設定した。調査面は14世紀前後の整地面と考えられる。遺構は調査区中央部で道路の南側側溝を確認した。この時点では道路部分とそれ以外では整地の土色が異なるなどの特色がみられたものの、道路北側側溝が確認できなかったことなどから道路と確定できず、建物基壇の整地と考えていた。それ以外では調査区東側では道路を切る14世紀後半の井戸（SE2005）を調査区西側では道路と軸を同じくする溝や土坑の他に柱穴群を確認した。

⑶第３面　第２面から80cm下げた標高1.7mを調査面として設定した。調査区中央で東西方向の道路側溝と道路硬化面を確認した。また道路整地層下では道路を築く以前の土坑を数基確認したが、その埋土中からは同安窯系青磁碗片が多く出土した。調査区東側では井戸や土坑など道路を切る多くの遺構や攪乱があり、これが Ⅰ区での道路の検出を困難にしたものと思われる。道路北側では多くの土坑と柱穴状

遺構を検出したが掘立柱建物を建てることはできなかった。調査区南西側では道路側溝に平行、もしくは直交する多くの小溝や柱穴群を確認した。中でも道路に直交するSK3359と平行するSK3388は土師皿が大量に出土した土坑であるが、これは調査区外でつながるL字型の溝となる可能性があり、その溝と道路間の小溝と柱穴群が建物基礎と考えられ（第28図）、道路に沿う建物が一部ではあるが判明した。

3. 遺構と遺物

(1)道路状遺構　第１・２面では側溝の一部のみを確認した。第３面では東西方向の側溝と路面の硬化面を確認した。道路と確定するのが遅れたため道路に直交するベルトやトレンチを設定できなかった。Ⅱ区中央部のベルトによる観察では、路面は最下層から上層までの高さ180cmを測り、白色砂と灰褐色土と暗褐色土により細かな整地を行う。路面は平らではなく、窪みには雨水等による攪拌も確認できた。路面最下層は12世紀後半から13世紀初めと推定される。最上層は現地表面から70cmほど下であるが、その上の堆積は道路整地層と異なり、また現地割りに沿った溝等も出てくるため、この層の変化は太閤町割りによる道路の廃絶を示すものと考えられる。その途中14･16世紀代には調査区東端で道路を切る井戸が確認されるなど道路が廃絶または幅の縮小が考えられるが、井戸の埋土上面にも道路の整地層が確認できたため、井戸廃絶後はまた道路として使用されている。道路は少しずつではありが南北に振れており、最初の地点から少しずつ北側に移動した後、14世紀頃に最初よりも更に南側へと移動し、その後また北側に移動するなど細かな移動を繰り返している。

第１面検出道路　側溝の一部分のみ確認した。下層の状況からするとSD1004とSD1124は道路北側の側溝である。側溝はⅠ区中央部分では確認できなかったが、これは井戸等の後世の掘り込みにより消失したためである。また道路南側の側溝も確認できなかった。側溝と平行するSD1137、SD1078、SD1152、SD1072のうち1078と1137は時期の異なる側溝の可能性が、その他は道路に面した敷地内の区画溝や建物基礎などであると考えられる。また、道路側溝と直交する小溝SD1116、SD1092、SD1098、SD1022・1024を確認したが、これらは南北方向道路の側溝もしくは道路に隣接する敷地内の区画溝である可能性が考えられる。確定するのは困難であるが、第３面で東西方向の側溝が途切れるが、その部分に直交溝が集中することを考えると、南北道路の側溝である可能性が高いと思われる。これについては本調査区の南北両側での道路状遺構の確認が不可欠であり、今後の調査結果が期待される。

第２面検出道路　道路南側側溝を1条確認した。道路北側側溝は確認できなかった。道路北側境界付近では道路部分の整地土が灰茶褐色砂質土で北側隣接地が黒褐色土と土質が異なっていたためなんらかの遺構があるものと考えて精査したものの、溝は確認できなかった。側溝が南側だけであった可能性が考えられる。

第３面検出道路　Ⅰ区では道路北側側溝、Ⅱ区では南北側溝を確認した。Ⅰ区で確認したSD3010とSD3141は検出面では少し蛇行していたが底面はきれいな直線を描く。Ⅰ区西側で立ち上がっており、それから南側に折れる溝SD3191が存在する。Ⅰ面で検出した南北溝のSD109ともSD3192の延長に近いため、ここに東西道路と南北道路の辻があった可能性が高いと考えられる。Ⅱ区では南北側溝を数本確認したが、これは道路が南北に移動すると共に側溝も移動したためである。

(2)溝状遺構　道路に平行する側溝と思われる溝状遺構29条と直交する溝状遺構18条を確認した。遺構番号が1000番台は第１面で、2000番台は第２面で、3000番台は第３面で検出した遺構である。

1）東西方向の溝状遺構

SD1004（第４図） 調査区東端で検出した。N-87°-Wとほぼ東西方向を向いており、西側はSK1157に切られる。幅48cm、深さ24cmを測る。土師質瓦や同安窯系青磁碗、白磁（口禿）片、陶器片、鉄釘などが出土しているがいずれも小片である。14 ～ 16世紀末である。

SD1021（第４図） 調査区西側中央部で検出した。残りが悪く明確な掘方はみられなかったが、検出時のプランからは1124に近い向きの溝残欠である可能性がある。出土遺物（第６図005･006）。005は高麗青磁碗底部である。006は口径9.4cm、器高1.5cmの土師皿で底面から外側に２カ所穿孔している。

SD1072（第４図） 調査区北東角で検出した。SK1002に切られる。方位はN-73°-Eを測る。幅24cm、検出面からの深さ８cmを測る。素焼きの塼の小片が出土した。中世後半以降である。

SD1124（第４図） 調査区中央部南寄りで検出した道路北側側溝である。途中やや曲がるものの、おおよその方位はN-86°-Eを測る。幅32 ～ 64cm、検出面からの深さ18cmを測る。陶器甕片、高麗青磁片、土師器鉢、白磁皿Ⅸ類片、滑石片、青花碗、同安窯系青磁片、鉄釘、土器玉が出土した。中世末から近世と考えられる。出土遺物（第７図007）。青磁碗底部である。見込みに印がみられる。

SD1137（第４図） 調査区中央部北寄りで検出した。SD1124に沿う。道路側溝の一部もしくは道路北側敷地の区画溝である。幅24cm、検出面からの深さ10cmを測る。

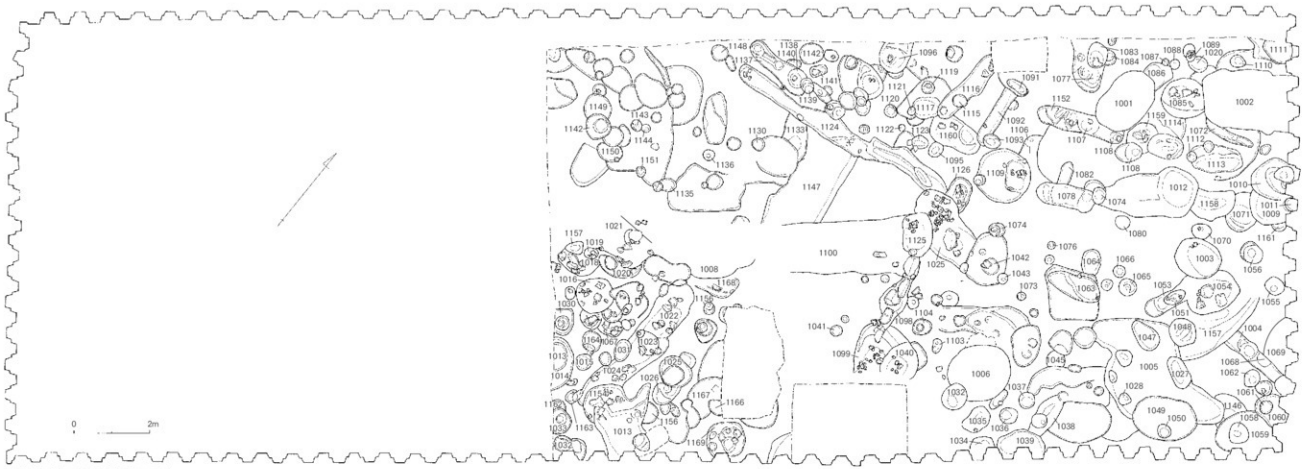
SD1152（第４図） 調査区東端北寄りで検出した。方位はN-70°-Eを測る。道路側溝とはやや方位が異なり、２m南側に位置するSK1078と平行する。幅56cm、深さ７cm、長さ2.4mを測る。擂鉢、火鉢、同安窯系青磁小片などの他に近世に降る遺物が出土している。近世から近代と思われる。

SD2035（第４図） 調査区東端で検出した。西端がやや蛇行しているが方位はほぼN-76°-Eをとり、主軸は東西方向に近い。切り合いがあるSK2036と主軸を同じくする。道路中央部に位置しており、SK2036と併せて道路上のなんらかの施設である可能性も考えられるが、SE2057・SB01と道路の境界部に位置することから道路南側側溝である可能性もある。この場合道路北側端はSB02になる可能性があり、その場合の道路幅は約1.4mと下層に比べかなり狭くなるものである。土師質鉢、土師質瓦片、須恵質片口鉢、土鍋、火鉢、土師質擂鉢、白磁小片、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、平瓦瓦当片、褐釉陶器片、須恵器鉢片が出土した。いずれも小片である。13世紀後半～ 14世紀と考えられる。

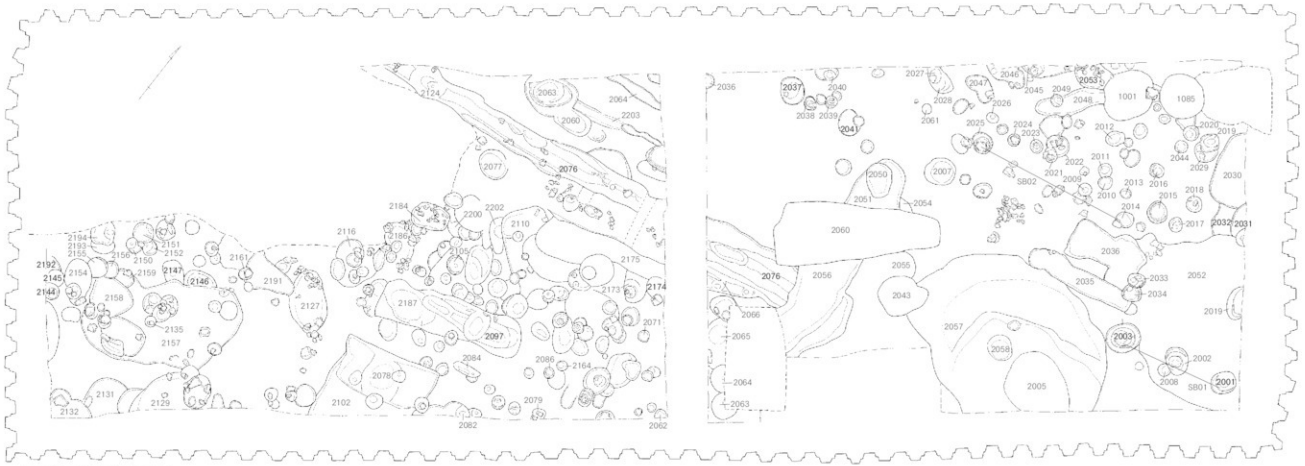
SD2061（第４図） 調査区中央北端で検出した。方位をN-84°-Eにとり、道路側溝とほぼ平行する。西端をSK2063に、東端を2058に切られる。長さ2.6m、幅14 ～ 24cm、検出面からの深さ６cmを測る。遺物は土師坏が1枚に土師皿片が20 ～ 30枚分出土した。うち一枚は灯明皿として使用されている。土師皿で計測可能な程度に復元できたのは15枚で口径は8.56 ～ 9.82cmを測り、平均は8.97cmである。13世紀後半～ 16世紀である。

SD2062（第４図） 調査区中央部で検出した。SD2056に切られる。SD2076･2191と同じ溝で、道路南側側溝である。方位をN-79°-Eに取る。幅86cm、検出面からの深さ21cmを測る。西端部に溝底面を掘り下げてイルカ類の頭蓋骨を埋置したSK2124がある。土師坏が5 ～ 6枚と土師皿が１枚出土した他、同安窯系青磁片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1類、陶器壺、鉄滓、銅銭、土器玉、鉄片などが出土した。土師坏は径が13.5cmで器高が2.5cm、土師皿は径８cm、器高1.3cmを測る。その他にイヌ、イルカ椎骨、スッポン腹甲板、イタボガキなどの動物遺存体が出土している。中世後半である。出土遺物（第７図008 ～ 011）。008は白磁碗Ⅸ類である。009 ～ 011は土師坏。011は見込みに回転ケズリがみられる。

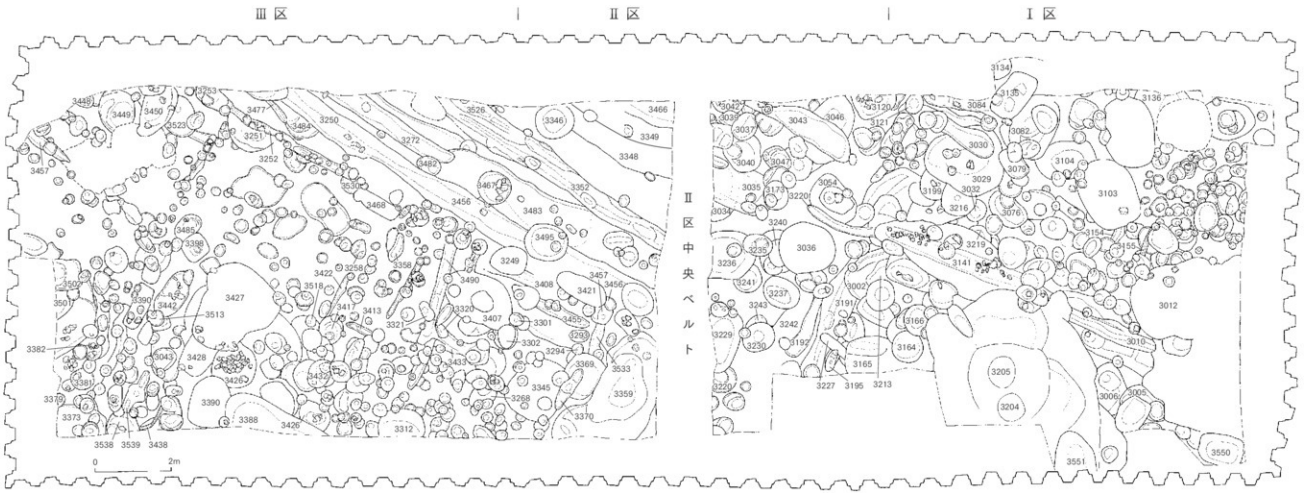
SD2064（第４図） 調査区中央北端で検出した。やや蛇行するが方位をN-74°-Eにとり、東西道路側溝にほぼ平行する。北側側溝の痕跡か。幅20 ～ 32cm、検出面からの深さ5cmを測る。陶器壺（被熱あり）、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、同安窯系青磁碗、土師椀、白磁碗、須恵質鉢、陶器壺片、土師皿片多量が出土し



調査区第1面全体図(1/100)　Ⅲ区　Ⅱ区　Ⅰ区



調査区第2面全体図(1/100)



調査区第３面全体図(1/100)

北側壁面土層図(1/100)

た。いずれも小片である。中世後半と考えられる。

SD2066（第４図） 調査区中央で検出した。SD2062に沿う。SD2056に切られる。西端がⅡ区中央ベルトにかかり、ベルトから西側の溝とはうまくつながらないが、SD2175につながる可能性がある。方位はN-66°-Eを測る。道路側溝とはわずかに方位がずれる。幅30cm、検出面からの深さ40cmを測る。底面で柱穴状の掘り込みを検出した。須恵質鉢、龍泉窯系青磁連弁碗C群、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、陶器大甕、陶器盤、同安窯系青磁碗、瓦質鉢、羽釜、土師皿、土師坏が出土した他、イルカ上顎片等の動物遺存体が出土している。14世紀と考えられる。

SD2175（第４図） 調査区中央で検出した。Ⅱ区中央ベルト西側に位置する。遺構の痕跡のみであるが、SD2066につながる溝と思われる。遺物は須恵器鉢、同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗Ⅱ-A類、小茶碗（口禿）、陶器片が出土した。14世紀と考えられる。

SD3010（第５図） 調査区東端で検出した。道路北側側溝で方位をN-63°-Eにとる。幅84 ～ 102cm、検出面からの深さ38cmを測る。遺物は同安窯系青磁碗・皿片、白磁碗Ⅳ類片、須恵器甕片、須恵質平瓦片、土師坏片が出土した。13 ～ 14世紀と考えられる。

SD3030（第５図） 調査区北東側で検出した。SK3029を切る溝状の土坑である。主軸をN-81°-Eにとる。幅32cm、検出面からの深さ15cmを測る。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類片、同安窯系青磁碗片、褐釉壺片、瓦器椀片、土師皿片が出土した。12世紀末～ 13世紀か。

SD3141（第５図） 調査区東側で検出した。SD3010の西側に連続する同一の溝である。道路北側側溝で方位をN-64°-Eにとる。検出面近くで土師皿が多く出土した。土層断面からは時期の異なる側溝が重なっていたことが判明した。溝の幅が広いのは時期によって側溝が南北に振れたためである。土層観察では少なくとも３条の溝が切り合っており、上層の溝は立ち上がりも緩く、底面は軽く蛇行していたが、最下層の溝は底面幅が30cm前後でほぼ直線的である。SD3220を除く全ての溝がⅠ区西端で立ち上がり、西側のSD3348やSD3466との間に2.5m程の間隔があるが、第1・2面ではこの部分で南北方向の溝が検出されていることから、ここが東西道路と南北道路の辻であった可能性が考えられる。遺物は各時期の遺物が混じっているが、多量の土師皿・坏片、同安窯系青磁碗・皿片、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、瓦質片口鉢、土師坏、土師鍋、須恵器大甕、羽口などが出土しており、最も新しい遺物は14世紀代である。出土遺物（第７図012 ～ 015）。012は陶器甕口縁である。013・014は土師坏、015は土師質鍋である。

SD3220（第５図） 調査区中央やや東寄りのⅠ区とⅡ区の境で検出した。東西道路の北側側溝が途切れた部分に位置し、途切れた溝の間をつなぐように伸びる。幅24cm、検出面からの深さ14cmを測る。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、白磁皿Ⅸ類、土師坏が出土した。14世紀前半と考えられる。

SD3250（SD3456）（第５図） 調査区中央から西側で検出した東西道路の南側側溝で、わずかに弧を描くがおおよそN-70°-Eを示す。溝の西端は調査区外に伸びるが東端はⅡ区中央のベルト部分（東西道路と南北道路の辻にあたる部分）で立ち上がり、それから東側では確認できなかった。同安窯系青磁碗・皿片、白磁碗Ⅴ-４類、瓦器片、土師坏片、棒状土製品などが出土しているが棒状土製品は断面が方形で積み上げて炉を築く為に使用し1面のみが強く火を受けている。13世紀以降と考えられる。

SD3252（第５図） 調査区西北隅に位置しSK3253に切られる。SD3250に平行し方位はN-71°-Eを測る。幅16 ～ 30cmを測るが、深さは10 ～ 24cmと底面にやや凹凸がみられる。溝の底面で径が20cm、深さ10 ～ 20cm前後の小穴や径が20cm前後の礫が出土した。道路南側の敷地では、側溝と平行または直交する溝が断続的に検出されており、敷地内の区画溝、もしくは建物の基礎構造の痕跡と考えられる。遺物は同安窯系青磁、白磁水柱、瓦質鉢、土師坏が出土した。13 ～ 14世紀と考えられる。

SD3272（第５図） 調査区中央やや西寄りで検出した。SD3250に平行する東西道路の南側側溝である。

幅は約80cmを測り、北側にテラスが付く。深さはテラスまでが19cm、底面までは41cmを測る。西端は調査区外に伸びる。東端は同安窯系青磁片を敷き詰めたSK3483の西側で立ち上がる。溝が切れた部分が道路南側敷地への出入り口で、そこに多量の青磁片を敷いたものと考えられる。遺物は同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、耳壺片、白磁小片、茶褐釉片、土師坏・皿片などが出土している。13世紀前半と考えられる。出土遺物（第７図016･017）。２点とも龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。連弁をヘラで掻き取って描いており、鏑はみられない。

SD3348（第５図）　調査区中央部北端で検出した。東西道路北側側溝で方位をN-75°-Eにとる。SD3349、SD3466など他の側溝に切られ、北側の立ち上がりは不明である。深さ20cmを測る。遺物は土師坏片が10枚分程度、同安窯系青磁碗･皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、耳壺Ⅱ類が出土した。14世紀前半と考えられる。出土遺物（第７図019 ～ 026）。019･020は同安窯系青磁碗片である。021は陶器盤の口縁、022は陶器壺口縁、023は土師坏、024・025は土師皿である。026は土製品で炉を築くときに使用する煉瓦状のもので、1面のみがかなり焼けた状態で出土することが多い。

SD3349（第５図）　調査区中央部北端で検出した東西道路の北側側溝である。SD3348を切る。緩やかに蛇行しており幅14 ～ 23cm、深さ26cmを測る。遺物は陶器鉢Ⅰ-1b類、白磁碗Ⅴ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁片、白磁合子小片、土鍋片が出土した。14世紀中頃と考えられる。

SD3352（第５図）　調査区中央部北寄りで検出した東西道路の南側側溝で、方位をN-73°-Eにとる。幅48 ～ 54cm、深さ37cmを測る。Ⅱ区中央ベルトから東では検出できなかった。同安窯系青磁碗、瓦器小片、陶器盤片、陶器鉢、土師皿片、瓦器小片が出土した。13世紀と考えられる。出土遺物（第７図027）。青磁片である。壺の口縁か。内外面とも施釉している。

SD3408（第５図）　調査区中央部のやや南寄りに位置しSD3455に切られるが、方位はほぼ同じである。幅79 ～ 94cm、深さ30cmを測る。遺物は土師皿と坏が1点ずつ出土した。土師坏は内面静止ナデ、外底部には板状圧痕がみられる。13世紀の3407に切られるなど他の多くの遺構に切られており、12 ～ 13世紀と考えられる。出土遺物（第７図028 ～ 030）。028･029は土師坏、030は土師皿である。器高と口径は028が12.6cm、3.6cm、029が14.3cm、2.9cm、030が7.7cm、1.4cmを測る。

SD3433（第５図）　調査区中央やや西側の南寄りで検出した小溝断片である。方位はN-64°-Eで幅25 ～ 30cm、深さ22cmを測る。SD3320･3490に切られる。遺物は同安窯系青磁碗片、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、陶器壺、瓦器片、鉄釘の他に多くの土師坏・皿小片が出土した。12世紀後半～ 13世紀と考えられる。

SD3455（第５図）　調査区中央やや南寄りに位置する小溝で方位はN-76°-Eを測る。幅32cm、深さ8cmを測る。遺物は同安窯系青磁小片、陶器甕片、褐色陶器片等が出土した。12 ～ 14世紀と考えられる。

SD3457（第５図）　調査区の西端に位置する小溝である。撹乱の3458に切られるがSD3444とは連続するものと思われる。方位はN-88°-Eを測る。幅32cm、深さ39cmを測る。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類片、同安窯系青磁碗片２点、白磁小片、土師坏片１点が出土した。12世紀後半と考えられる。

SD3466（第５図）　調査区中央部北端で検出した東西道路の北側側溝である。北側立ち上がりは調査区外に延びるため不明である。幅は70cm以上で深さは35cmを測る。Ⅱ区中央ベルトから東側では検出できかったためベルト下で立ち上がるものである。遺物は同安窯系青磁碗片、白磁碗片、陶器壺片などが出土した。12世紀末～ 13世紀前半と思われる。

SD3477（第５図）　調査区西北隅で検出した小溝で、方位はN-77°-Wを測る。幅17cm、検出面からの深さ26cmを測る。道路側溝やその他の溝とは方位が異なる。遺物は同安窯系青磁碗片、白磁片、土師鍋片、陶器片が出土した。12世紀末～ 13世紀と考えられる。

SD3526（第５図）　調査区やや西側の北端で検出した道路側溝で方位N-76°-Eを測る。溝の西側は調

査区外に延び、東端はSD3352に切られる。幅29～40cm、検出面からの深さは25cmを測る。SD3352と同様に東西道路の南側側溝と思われる。遺物は陶器盤Ⅰ類が出土した。12世紀末～14世紀と考えられる。

2)南北方向の溝状遺構

SD1022・1024（第4図） 調査区中央南寄りで検出した。道路南側敷地の区画溝と思われる。方位はほぼ南北方向で、幅63～91cm、検出面からの深さ32cmを測る。瓦器擂鉢、滑石片、白磁碗Ⅴ類片、白磁皿、同安窯系青磁小片、龍泉窯系青磁碗Ⅲ～Ⅳ類、褐色陶器片、土師質鉢、土鍋片、土師坏・皿片、銅銭の他に6世紀後半の須恵器坏の破片が出土した。14～16世紀と思われる。

SD1038（第4図） 調査区東側南寄りで検出した。方位はN-3°-Wで幅56cm、深さ13cmを測る。中世末と思われる。出土遺物（第6図001）。土師質鍋である。にぶい橙色を呈し、白色砂を多く含む。

SD1082（第4図） 調査区東側で検出した。SK1078に切られる。方位はN-21°-Wで幅31cm、検出面からの深さ9cmを測る。確実に溝か不明であるが、道路の辻部に位置するため、南北道路側溝の残欠である可能性がある。遺物は白磁碗片と糸切りの土師皿が出土した。14～16世紀と考えられる。

SD1092（第4図） 調査区東側北端で検出した。方位をN-7°-Wにとり、東西方向の道路側溝と直交する。北側をSK1091に切られ、現状で長さ1.7m、幅34cm、検出面からの深さ19cmを測る。同安窯系青磁片、染付片、白磁皿・碗片、須恵器擂鉢片、土師坏・皿が出土した。14世紀以降と考えられる。

SD1098（第4図） 調査区中央やや東側に位置する。長径30～50cmの礫が浅い溝に埋められた状態で検出した。主軸はN-6～10°-Wを測り、東西方向の側溝（SD1124）とは直交に近い。また、道路北側に位置する南北溝SD1092とつなぐと第3面で検出した東西側溝（3141）の立ち上がり近くを通ることから、南北道路の東側側溝である可能性がある。遺物は青磁皿（15～16世紀）や同時期の白磁碗片の他に陶器大甕片、土師質鍋が出土している。15～16世紀と考えられる。

SD1116（第4図） 調査区東側北端に位置し、SD1092にほぼ平行する。方位はN-5°-Eとほぼ南北の溝で幅46～56cm、検出面からの深さ18cmを測る。南北道路の側溝、もしくは東西側溝のSD1124と南北溝SD1092に区切られた敷地内における区画溝や建物雨落ち溝などの可能性が考えられる。遺物は少量の土器片と瓦片が出土した。溝の向きからは中世後半と考えられる。

SD2056（第4図） 調査区の中央やや東寄りで検出した。2060に切られる。南側でやや屈曲するが、方位はおよそN-17°-Wで南北方向の溝である。幅1.4m、検出面からの深さは27cmを測る。北端は道路中央まで伸び、SD2035の延長線上に位置する。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、白磁皿Ⅸ類片、黒釉瓶、褐釉陶器、瓦器擂鉢、須恵器鉢が出土した。14世紀と考えられる。出土遺物（第6図002）。象嵌入り青磁壺の小片である。胎土は緻密。内外面に白色土で象嵌している。

SD3154（第5図） 調査区東端部で検出した小溝の残欠である。方位はN-11°-Wで幅23cm、検出面からの深さ17cmを測る。遺物は同安窯系青磁碗の小片が1点のみ出土した。13～14世紀と考えられる。

SD3155（第5図） 調査区東端部のSD3154の東側で検出した。緩やかな弧を描きながらSD3154に平行する。道路北側敷地内の区画溝、もしくは建物等の下部構造の痕跡である可能性がある。遺物は青磁皿の小片と糸切りの土師皿片が出土した。13～14世紀と考えられる。

SD3191（第5図） 調査区東側のⅠ区とⅡ区の境近辺で検出した。方位はN-15°-Wで幅は56cm～80cm、検出面からの深さ55cmを測る。溝の北端は東側に折れて東西道路側溝のSD3141に合流する。南北道路の東側側溝であると思われる。遺物は同安窯系青磁碗片、白磁片、褐釉陶器、陶器甕、土師坏が出土した。14世紀と考えられる。出土遺物（第6図003）。白磁皿Ⅸ類である。

SD3192（第5図） 調査区中央東寄りのSD3191の西側に位置する。方位はほぼSD3191・3242と同じである。全体に蛇行しており、北側はSD3191に切られる。幅約28cm、検出面からの深さ13cmを測る。13

～14世紀と考えられる。

SD3195（第５図）　調査区中央部東寄りでSD3191の東側に位置する。SD3191に切られながら平行する。幅27cm、検出面からの深さ10cmを測る。遺物は白磁碗Ⅴ類片、同安窯系青磁碗片、陶器片、土師坏片が出土した。12世紀末～14世紀と考えられる。

SD3242（第５図）　調査区中央東寄りでSD3192の西側に位置する。方位はN-89°-Wで、幅58cm、検出面からの深さ27cmを測る。遺物は須恵器鉢（14世紀）片、白磁片、同安窯系青磁片、瓦器片、須恵器甕が出土しており、14世紀前後と考えられる。

SD3370（第５図）　調査区中央部南寄りで検出した。方位はN-4°-Wを測る。幅35cm、深さ8cmを測る。中心に底面から深さ60cmの柱穴状の掘り込みがみられる。遺物は同安窯系青磁碗小片、陶器壺片、白磁片、土師坏小片が出土した。13世紀～中世後半と考えられる。

SD3422（第５図）　調査区西側で検出した。方位はN-13°-Wで長さ1.3m、幅13cm、深さ3cmを測る。遺物は褐釉陶器小片と瓦器片のみである。中世前半と思われる。

SD3490（第５図）　調査区中央部やや西寄りに位置する。方位はN-23°-WでSD3533と並行し、幅30cm、深さ15cmを測る。南側は底面が４～５cmほど深くなる。南端でSD3433と直交する。遺物は陶器片と土師坏片が1点が出土した。溝の向きなどから12～13世紀と考えられる。

SD3533（第５図）　調査区中央部南寄りで検出した。やや蛇行するが方位はN-23°-Wで幅23～30cm、深さ4cmを測る。南落ち溝もしくは建物基礎等の掘り込みと思われる。遺物は陶器大甕片が出土したのみである。12～13世紀と考えられる。

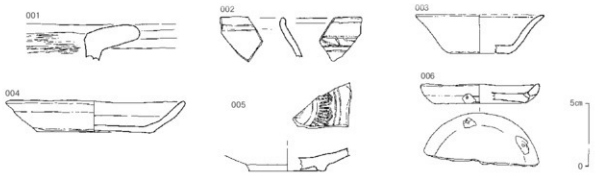
SD3539（第５図）　調査区西南端で検出した。方位はN-7°-Wで幅25cm、深さ16cmを測る。遺物は土師坏が出土した。12～13世紀と考えられる。出土遺物（第６図004）。土師坏である。口径14.3cm、器高2.4cmを測る。見込み中央に静止ナデを施し、底部は糸切りで細かな板状圧痕がみられる。

3）不明な溝

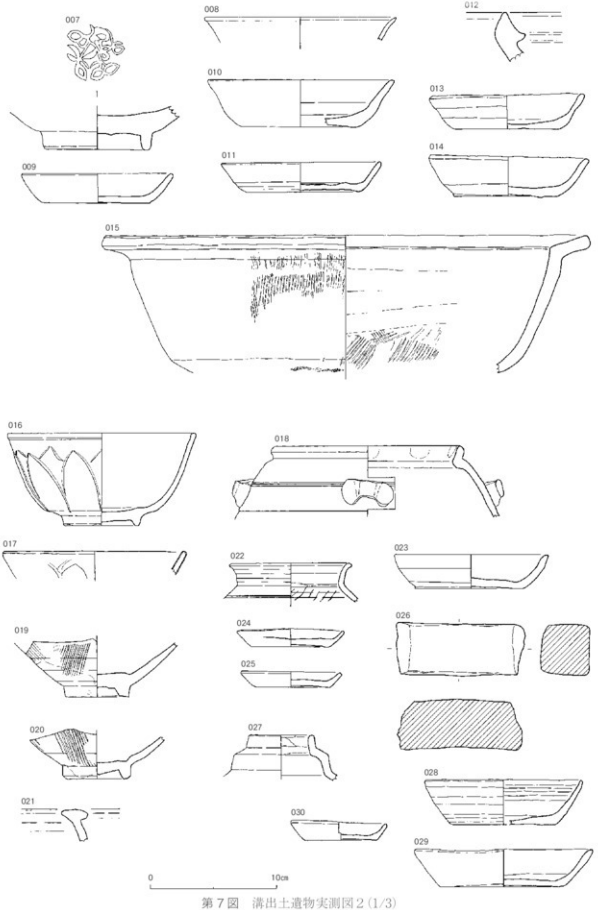
SD2048（第４図）　調査区の北東端部で検出した。SE0001、SK2053など近世の遺構に切られる。やや蛇行するが方位をN-29°-Eにとり、現地割りに近い印象を受ける。現状で長さ1.8m、幅54cm、検出面からの深さ25cmを測る。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、白磁耳壺片、黒釉小鉢片、須恵質鉢片、土鍋、土師坏が出土した。14～15世紀前後か。

SD2060（第４図）　調査区中央東寄りで検出した。方位はN-51°-Eで現在の地割りとほぼ平行する。最大幅1.8mを測る。近現代である。

SD3438（第５図）　調査区西端部の南辺で検出した。南端は調査区外に延びる。南側はN-40°-Eだが



第６図　溝出土遺物実測図１（1/3）



第７図　溝出土遺物実測図２(1/3)

途中で屈曲し、北側ではN-9°-Wを測る。幅6～10cm、検出面からの深さ11cmを測る。遺物は土師坏口縁1点のみである。方位と切り合いなどから13～14世紀と思われる。

(3)建物状遺構　調査区内では多数の柱穴状遺構を確認した。また、遺構の見逃しも予想されるため、整地層の掘り下げ時に確認した根石や礎石の可能性がある石と集石に関しては全体図に位置を記録したが、掘立柱建物を建てることはできていない。

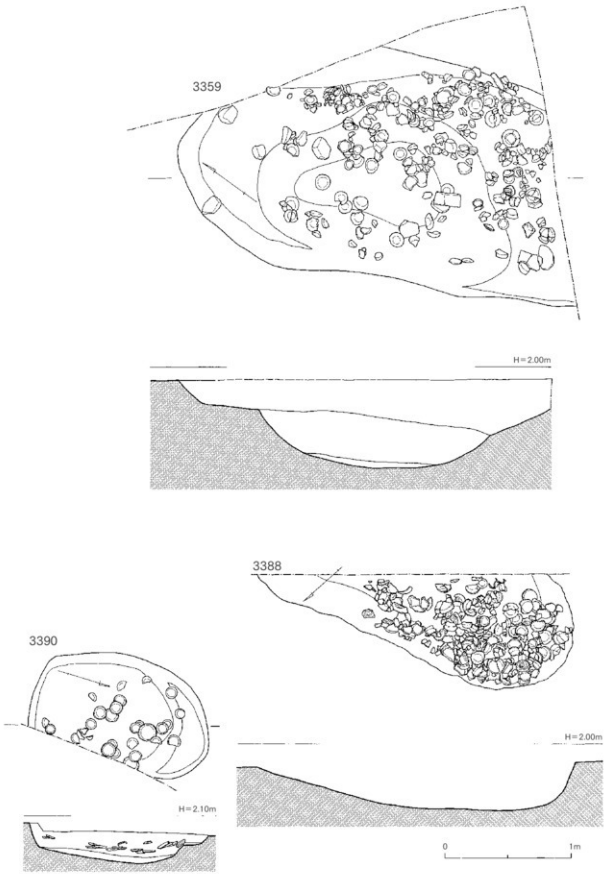
SB01（第18図）　第2面の東南隅部で検出した。主軸をN-65°-Eにとり、南北道路に平行する。柱穴状遺構の平面はいずれも楕円形を呈し径56～64cm、検出面からの深さ30～37cmを測る。柱穴間の距離は芯々で1.4～1.7mを測る。SE2005に切られているため、SP2003から西側に延びていたかどうかの確認はできない。道路に沿って建てられた掘立柱建物か柵であると考えられる。

SB02（第4図）　第2面の東端部で検出した。この付近では道路北側の側溝は確認していないが、白色砂を主体とする道路の整地層と道路北側の炭化物・土器片を多く含む黒褐色土との整地の境界が明瞭に確認できる場所であり、その境界に沿って3個の根石が並ぶのを確認した。根石は径30～39cm前後を測り、石の間隔は2.0～2.3mを測る。掘立柱建物の一部か、道路境界に沿う柵の可能性が考えられる。SB01とSB02をそれぞれ道路南側と北側の境界柵と考えるとこの時期の道路幅は2.8mを測り、その道路中央にSK2035・2036が位置することになる。SK2035底面とその西側の道路上には礫が集中しているのがみられるが、これも道路状遺構の一部であろうか。遺物は出土していないが、向きと出土層位から13～14世紀と考えられる。

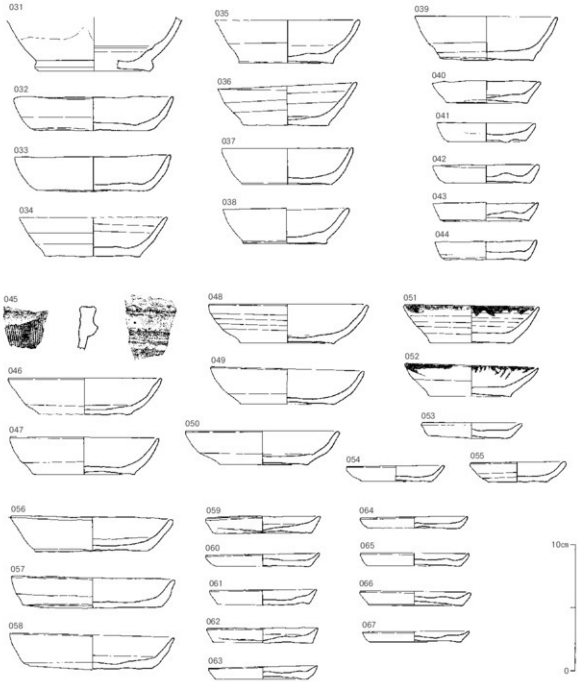
(4)土師坏・皿出土遺構　第3面で3基確認したが、そのうち2基（3359・3388）は溝状を呈しており、両方とも壁の土層から第1面から掘り込んでいることが判明した。この2条は調査区外でつながっている可能性も考えられるが、そうなるとL字型を呈することとなり、道路側溝のSD3456等とあわせて考えると溝に囲まれた長さ8m、幅6m程の長方形の空間となり、建物を囲むものと思われる。

SK3359（第8図）　調査区中央部南辺で検出した。幅1.8m、深さ1m以上の溝状の遺構で方位をN-26°-Wにとる。底面から10～20cmほど浮いた状態で土師皿と坏が敷いたような状態で多量に出土した。底面は北端から70cmほど南側で径2.1m、深さ40cm程の楕円形に窪む。調査区南壁の土層により第1面からの掘り込みであることが確認できた。土層は暗褐色土を主とし、炭化物を多く含む層や白色砂層がレンズ状の堆積をなす。土師皿と坏以外には同安窯系青磁碗小片、耳壺片、陶器盤Ⅰ-2b類、渥美窯甕片、瓦質鉢、滑石製石鍋片が出土した。掘り込んだ層位から14世紀後半以降である。出土遺物（第9図031～044）。031は褐釉陶器壺片である。復元口径9.4cmを測る。032～039は土師坏である。032は口径12.6cm、器高2.7cm、。033は口径12.6cm、器高2.9cm、034は口径11.6cm、器高3.1cm、035は口径11.6cm、器高3.4cm、036は口径11.3cm、器高3.5cm、037は口径10.3cm、器高3.4cm、038は口径10cm、器高2.8cm、039は口径11.3cm、器高3.4cmを測る。いずれも見込み全体に静止ナデを施し、034～039は口縁立ち上がりがやや直線的で器高も高い。040～044は土師皿である。器高と口径は040が8.5cmと1.8cm、041が7.9cmと1.5cm、042は8.4cmと1.5cm、043は8.3cmと1.5cm、044が8.2cmと1.5cmを測る。いずれも見込み全体に静止ナデを施す。切り離しは糸切りで041は板状圧痕がみられる。土師坏・皿を合せた出土量は35.99kgを測る。

SK3388（第8図）　調査区西側の南辺に位置する幅1m以上の溝状遺構で方位をN-66°-Eにとる。底面までの深さは1m以上で底面から10cmほど浮いて土師皿と坏が多量に出土した。南端の土層によりSK3359と同様に第1面からの掘込みであることが確認されたことからSK3359と調査区外でつながるL字型の溝である可能性がある。遺物は土師皿と坏以外に同安窯系青磁碗小片、白磁片、須恵質大甕、須恵質瓦片、瓦質擂鉢、土師質瓦片（縄目圧痕）、滑石製石鍋片が出土した。SK3359と同様14世紀後半～



第８図　SK3359･3388･3390遺溝実測図(1/30)



第９図　SK3359･3388･3390出土遺物実測図(1/3)

中世末である。土師坏と皿の遺存状態が悪く口縁部と底部を1/2以上復元できた個体は少なく、土師坏が26点、土師皿が13点にとどまる。土師皿の口径は7.36 ～ 8.26cmで平均は7.6cm、器高は1.2 ～ 1.8cmで平均1.42cmを測る。土師坏口径は11.56 ～ 13.98cmで平均12.35cm、器高は2.5 ～ 3.5cmで平均2.93cmを測る。土師坏と土師皿を合わせた重さは24.63kgを測り、土師坏に換算すると200枚強に値する。出土遺物（第９図045 ～ 055）。045は陶器鉢口縁である。口縁内面側に断面M字型の突帯が付く。046 ～ 052は土師器坏である。051･052は灯明皿として使用されている。口径と器高は046が12.2cmと2.9cm、047が11.8cmと3cm、048が12.6cmと3.1cm、049が12.1cmと2.9cm、050が12.1cmと2.65cm、051が10.7cmと3cm、052が10.6cmと2.6cm

を測る。いずれも見込みに静止ナデは施さない。糸切りで051のみ板状圧痕がみられる。053 ～ 055は土師皿である。口径と器高は053が8.0cmと1.3cm、054が7.8cmと1.25cm、055が7.6cmと1.6cmを測る。054にのみ見込みの静止ナデを施す。

SK3390（第８図） 調査区西側の南辺、SK3388の西側に隣接する。遺構は東側をSK3388に切られるが、現状で平面形は楕円形を呈し長径1.45m、検出面からの深さ32.5cmを測る。断面は北側にテラスがつくが全体的に浅皿状を呈す。底面から４～15cmほど浮いた状態で土師皿と坏が出土した。土師坏と土師皿を合わせた重量は2.68kgを測る。遺存状態が悪いため口径の1/2以上復元できたのは少なく土師皿が13枚、土師坏は０枚で、土師皿の口径は8.19 ～ 9.44cmで平均は8.69cm、器高は1.1 ～ 1.4cmで平均1.22cmを測る。完形の土師皿1枚の重さは50.46 ～ 55.10gを測る。土師皿と坏以外に同安窯系青磁碗小片が出土した。13 ～ 14世紀と考えられる。出土遺物（第９図056 ～ 067）。056 ～ 058は土師坏である。復元口径と器高は056が12.9cmと2.8cm、057は13.0cmと2.5cm、058が13.0cmと2.95cmを測る。いずれも見込み中央に静止ナデを施し、底部は糸切りで板状圧痕がみられる。059 ～ 067は土師皿で059は9.1cmと1.3cm、060は9.1cmと1.05cm、061は8.4cmと1.25cm、062は8.8cmと1.2cm、063は8.6cmと1.05cm、064は8.5cmと0.95cm、065は8.6cmと1.0cm、066は8.8cmと1.15cm、067は8.4cmと0.9cmを測る。見込み全体もしくは2/3の範囲に静止ナデがみられ、底部は糸切りで066以外は板状圧痕がみられる。

⑸土坑

SK1003（第10図） 調査区の東端部で検出した。方位をN-88°-Eにとる。平面形は楕円形を呈し長径122cm、検出面からの深さは66cmを測る。SK1054を切る。遺物は白磁片、同安窯系青磁片、瓦片、土師皿、石玉、土錘などが出土した。近世から近代と考えられる。

SK1006（第10図） 調査区東側南辺で検出した。平面形は楕円形を呈し長径167cm、検出面からの深さ96cmを測る。断面は箱形を呈す。遺物は擂鉢、擂皿、大型土鍋、見込みに菊花文の貼り付けがある青磁碗片、国内産天目が出土しており中世後半～近世と考えられる。

SK1069（第10図） 調査区北東端で検出した。SD1004に切られる。ほとんどが調査区外にでているためその全体は不明であるが現状では楕円形を呈するようにみえる。現状で長さ1.4m、深さ33cmを測る。断面は浅皿状を呈す。中世後半と考えられる。

SK1078（第10図） 調査区の東側で検出した楕円形の土坑である。方位はN-61°-Eで東端を柱穴状遺構に切られる。現状で長さ160cm、幅59cm、深さ11cmを測る。底面は東西両側が８～15cm程窪んでいる。道路より北側に位置するが道路側溝とは方位がずれており、北側に位置する1152と共に現地割りに近い感じを受ける。遺物は染付小片、陶器片、土師皿片、陶器壺片が出土した。中世後半～近世と考えられる。出土遺物（第15図068）。068は陶器壺である。

SK1085（第10図） 調査区北東端に位置し、SK1002に切られる。平面は円形を呈し、径約１m、深さ49cmを測る。東側に底面から20cmの高さのテラスを持つ。底面に15 ～ 30cmの礫が集中する。遺物は同安窯系青磁小片、土師質鉢、土師坏・皿片、鉄釘、銅片が出土した。中世後半と考えられる。

SK1099（第10図） 調査区中央東寄りの南辺で検出した。SD1098とSK1040に切られる。遺構南側が調査区外に延びる。平面は楕円形を呈し、現状で南北1.3m、検出面からの深さ24cmを測る。北側にテラスをもつ。中央掘り下げ部分で角礫が多く出土した。遺物は青磁碗（14 ～ 15世紀）片、白磁皿Ⅲ類、陶器甕片、土師質や須恵質の瓦片、土鍋、土師皿片が出土した。13 ～ 15世紀と考えられる。

SK1146（第10図） 調査区東南端に位置しSK1005・SK1059に切られる。現状で南北径90cm、深さ73cmを測る。遺物は白磁小片と土師甕片のみである。中世末か。出土遺物（第15図069）は青磁片である。

SK1160（第10図） 調査区東側の北寄りに位置する。方位はN-83°-Eで南北道路の側溝であるSD1124

に平行する。平面は楕円を呈し長径143cm、幅82cm、検出面からの深さ33cmを測る。東側底面が深さ5cmほど浅皿状に窪む。南北道路側溝の可能性があるSD1092とSD1116に切られる。遺物は陶器片と土鍋小片、土師坏・皿が出土した。中世後半と考えられる。

SK2036（第10図） 調査区東端に位置する東西に長い長方形で主軸はN-74°-Eを測る。東端で南側に折れ、SD2035に切られる。東西長は現状で204cm、深さは12cmを測る。底面はほぼ水平で、10～15cmの角礫が出土した。道路と推定される部分の中央に位置しており、道路上の何らかの遺構であろうか。遺構の西側1.5mにも礫が集中する部分がある。遺物は同安窯系青磁片、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、褐釉陶器片、須恵器片口鉢片、火鉢、土師質鍋、土師質瓦、平瓦瓦頭が出土した。14～15世紀と考えられる。出土遺物（第15図072）。072は土師坏である。復元口径11.5cm、器高2.6cmを測る。浅黄橙色を呈す。

SK2097（第11図） 調査区中央部やや西側に位置する溝状の土坑でSK2187に切られる。方位はN-67°-Eで東西道路の側溝であるSD2191に平行する。幅104cm、深さ94cmを測る。底面中央と西側が窪む。遺物は同安窯系青磁碗片、白磁Ⅴ類、白磁Ⅲ・Ⅸ類、国産陶器甕片、瓦器椀、土師坏片、須恵質擂鉢、瓦器鉢、滑石製石鍋片、鉄釘が出土した。14世紀と考えられる。出土遺物（第15図074～076）。074は黒色土器椀、075は土師皿、076は土師坏である。075は復元口径7.8cm、器高1.1cm、076は11.2cm、3.1cmを測る。075・076は横ナデのみで静止ナデはみられない。

SK2102（第11図） SK2097の南側に位置し主軸をN-69°-Eにとる。SK2097や東西道路に平行する。平面は方形を呈し、遺構の南側は調査区外に延びる。東西2.6m、南北2.4mを測る。遺構の南側は深さ13cmほどで床面に達する。北側には東西2.6m、南北1.3mの東西に長い長方形の掘り込みがみられる。北側掘り込みの中央が径1m、深さ18cmに窪む。北側掘り込みが南側とは別遺構の可能性もあるが、東西の幅が同じことや、検出時の土色が同一であったことから同じ遺構と考える。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、同安窯系青磁碗、陶器大甕、瓦器鉢、土師坏・皿片、砥石、鉄滓が出土した。13世紀中頃以降と考えられる。出土遺物（第15図078～080）。078は土師坏、079は土師皿、080は瓦質鉢である。

SK2110（第11図） 調査区の中央で検出した。遺構の東側をSK2113に切られる。平面は長径177cm、短径130cmの隅丸長方形を呈し、方位をN-29°-Wにとる。検出面からの深さ9cmを測るが床面西南隅が90×59cmの範囲で箱形に窪んでいる。遺物は白磁碗Ⅶ類、龍泉窯系青磁片、同安窯系青磁片、白磁碗Ⅸ類、須恵質甕片、瓦器椀片、土鍋片、土師皿・坏片、鉄釘が出土した。14世紀と考えられる。

SK2129（第10図） 調査区の西端南辺で検出した。2128に切られる。同安窯系青磁片、白磁皿Ⅵ類、陶器盤Ⅱ-1a類、瓦質鉢、須恵器鉢、瓦器椀、土師質鍋、土師坏・皿、鉄釘が出土した。14世紀か。

SK2187（第11図） 調査区の中央やや西寄りで検出した。SK2097を切る。平面は長径156cm、短径110cmの不整形の楕円で、主軸をN-60°-Eにとる。検出面からの深さ48cmを測る。遺物は白磁皿Ⅸ類、同安窯系青磁片、須恵質甕（格子タタキ）、土師坏片多数が出土した。14世紀と考えられる。出土遺物（第15図092・093）。土師坏である。口径と器高は092が12.1cm、2.4cm、093が12.5cm、2.5cmを測る。

SK2202（第11図） 調査区の中央部で検出した柱穴状遺構である。SK2110に切られる。長径94cm、検出面からの深さ58cmを測る。出土遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、須恵質鉢、土鍋（肥前系）、土師皿（径8.5～9cm）、土師坏片（約20個体分）が出土した。13世紀末～14世紀前半と考えられる。出土遺物（094～096）。土師皿である。口径と器高は094が8.8cm、1.2cm、095が8.5cm、1.05cm、096が7.6cm、1.1cmを測る。095は見込みに静止ナデを施す。底部は糸切りで094・095は板状圧痕がみられる。

SK3005（第11図） 調査区の東南端で検出した。SK3004と3140に切られ、3006を切る。平面は隅丸方形で径96cm、検出面からの深さ58cmを測る。道路築造前に埋められた土坑である。遺物は同安窯系青磁碗の大きな破片が多数出土した他、陶器盤Ⅱ-1C類、須恵質片口鉢、渥美甕片、土鍋片、下層か

らは同安窯系青磁碗片と陶器盤Ⅱ類の破片が出土した。12世紀末～13世紀前半か。出土遺物（第15図097・098）。097は瓦質鉢で復元口径27cm、器高9.4cmを測る。灰色を呈す。098は同安窯系青磁碗である。

SK3006（第11図） 調査区東端部のSK3005の西側に位置する。SK3004と3005、そして西側をSE3205に切られる。現状では長方形に近い平面形で長径1.3m、検出面からの深さ56cmを測る。SK3005同様道路築造以前に掘られた土坑である。遺物は同安窯系青磁碗片、白磁碗Ⅴ類小片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4b類、須恵質甕、陶器蓋、褐釉陶器片、鉄釘が出土した。12～13世紀と考えられる。出土遺物（第15図099～101）。099・100は陶器蓋である。099は復元口径18.4cmを測る。回転ナデで、上半部に明オリーブ灰色の釉を施す。100は復元口径22cmを測る。轆轤による回転ナデで外面に自然釉がつき、天井部2ヶ所には焼成前の穿孔を施す。101は陶器鉢である。復元口径27cmを測る。釉は褐灰色を呈す。

SK3029（第12図） 調査区東側で検出した。SK3030・SK3079に切られ、SK3216を切る。平面は楕円形を呈し主軸はN-41°-Eを測る。長径216cm、短径175cm、深さ103cmを測る。底面は南西側にテラスが付き、北東側に向かって緩やかに傾斜する。遺物は多量の同安窯系青磁碗片の他に陶器鉢片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅷ類、白磁合子、瓦器椀、瓦質鉢、渥美甕、滑石製石鍋片、華南三彩片、また土師坏・皿も多く出土した。12世紀末～13世紀前半と考えられる。出土遺物（第15図102～104）。口径と器高は102が9.2cm、1.2cm、103が8.7cm、1.2cm、104が8.4cm、1.2cmを測る。

SK3034（第12図） 調査区中央で検出した。SD3035に切られる。Ⅱ区中央ベルトにかかって全体は不明だが、楕円形を呈し径2m、深さ87cmを測る。断面は逆台形を呈す。ベルトの土層観察から道路築造以前の土坑である。遺物は多くの同安窯系青磁碗・皿片の他に龍泉窯系青磁碗Ⅰ類片、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類片、陶器盤、陶器鉢、滑石片、土師坏、貝殻が出土した。12世紀中～13世紀前半と考えられる。

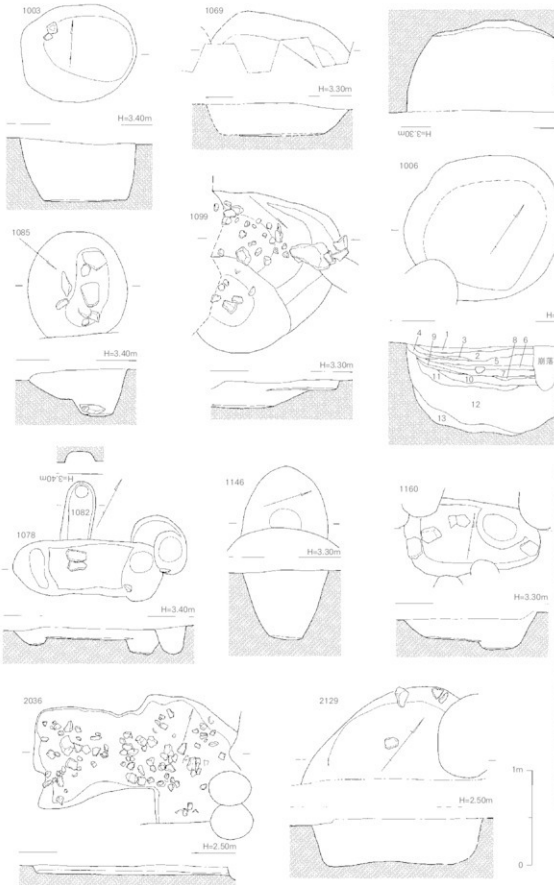
SK3035（第12図） 調査区中央で検出した。SK3034を切る。土坑ではなくⅡ区中央ベルト西側にある東西道路の北側側溝であるSD3348の続きの可能性もある。方位はN-62°-Eを測る。東側は南北道路との辻にあたるため立ち上がるものと思われる。幅113cm、深さ34cmを測る。底面は東側に向かって緩やかに立ち上がる。遺物は白磁碗Ⅴ類底部、同安窯系青磁碗・皿片、白磁碗Ⅷ類片、白磁水柱片、陶器甕片、滑石製石鍋片、土師皿小片が出土した。12世紀末～13世紀と考えられる。

SK3036（第12図） 調査区中央部のやや東側で検出した。方位はN-45°-Eを測る。平面は不整形の楕円を呈し長径187cm、短径147cm、深さ90cmを測る。覆土はレンズ状の堆積である。断面は半円形を呈し底面面積は狭い。廃棄穴か。底面直上でイノシシの頭蓋骨の一部（頬骨部）が出土した。遺物は白磁合子片、陶器盤Ⅰ-1b類、同安窯系青磁碗片、染付片、白磁皿Ⅸ類片、陶器壺片、常滑産甕口縁が出土した。13～14世紀前後と考えられる。出土遺物（第16図105～110）。105は陶器鉢である。復元口径31cmを測る。106・107は四耳壺である。釉は薄く灰白色を呈す。同一個体か。108は陶器壺で暗灰色を呈す。復元口径5.4cmを測る。109は瓦質羽釜、110は常滑甕である。

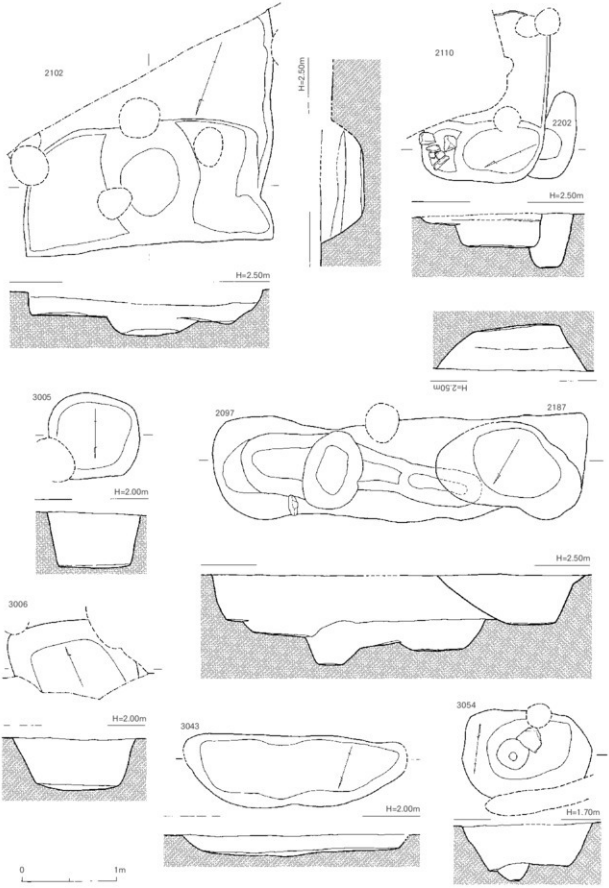
SK3040（第12図） 調査区中央部北壁寄りに位置しSK3037・3038等に切られSK3035を切る。主軸はN-82°-Eを測る。平面はやや東西に長い楕円で長径123cm、短径96cm、深さ95cmを測る。底面西側に径40cmの柱穴状窪みがある。遺物は白磁皿Ⅸ-1C、多量の同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、陶器鉢、褐釉片が出土した。白磁碗Ⅴ類の多くは熱のため発砲している。14世紀と考えられる。

SK3043（第11図） 調査区中央部北壁際で検出した主軸がN-72°-Eの東西方向に長い溝状の土坑である。SK3046を切る。覆土はやや暗灰茶褐色砂で下層の一部は灰色を呈す。現状で長さ約2.4m、幅57cm、検出面からの深さ24cmを測る。遺物は白磁碗Ⅸ類、白磁皿片、同安窯系青磁碗片1点、龍泉窯系青磁碗小片、陶器片、土師坏・皿が出土した。13世紀後半～14世紀と考えられる。

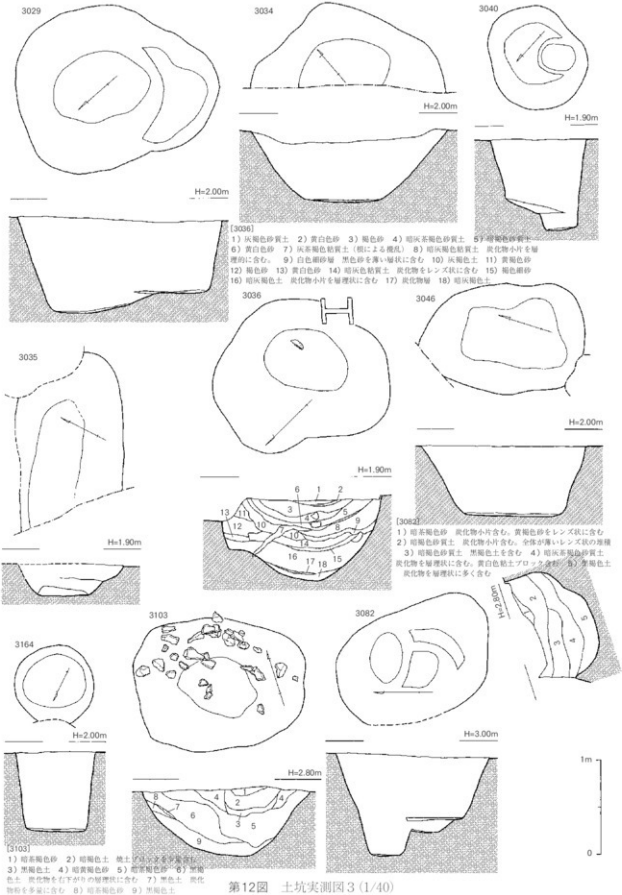
SK3046（第12図） 調査区中央部北壁際で検出した南北方向に長い土坑である。SK3043に切られる。



第10図　土坑実測図１(1/40)



第11図　土坑実測図２(1/40)



第12図　土坑実測図３(1/40)

遺構北端は調査区外に延びる。主軸方位はN-18°-Wを測る。現状で長径190cm、短径118cm、検出面からの深さ74cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平らである。覆土は暗褐色土で暗黄褐色砂を多量にやや層理的に含む。遺物は白磁碗Ⅶ・Ⅷ類、同安窯系青磁碗片、須恵質甕片、陶器大甕、鉄釘と獣骨が出土した。道路築造以前の土坑で、12世紀末と考えられる。

SK3054（第11図） 調査区のⅠ区とⅡ区の境界である道路辻部で検出した。SD3220に切られる。平面は東西に長い長方形で方位はN-84°-Eを測る。長径136cm、短径97cm、検出面からの深さ52cmを測る。断面は逆台形を呈す。底面やや西寄りに径34cmの柱穴状の掘方がみられる。東西道路と南北道路の辻部分に位置していることや道路築造以前の土坑であるSK3046と主軸が直交しており、方位に関連がみられるため、本遺構も道路築造以前に掘り込まれた土坑であると思われる。遺物は同安窯系青磁碗・皿片、白磁碗小片、陶器盤片、須恵質甕片、滑石錘、炉壁の他獣骨が出土した。12世紀後半と考えられる。出土遺物（第16図111・112）。111は同安窯系青磁碗、112は陶器壺である。

SK3079（第14図）。調査区東側で検出した。SP3080に切られる。平面は東西に長い楕円形を呈し主軸はほぼ東西方向を呈す。長径92cm、短径56cm、検出面からの深さ46cmを測る。遺物は多量の同安窯系青磁碗の他に瀬戸と思われる甕や白磁片、土師坏・皿片が出土した。12世紀末と考えられる。出土遺物（第16図113）。土師坏である。口径14.8cm、器高2.8cmを測る。見込み全体に静止ナデを施す。

SK3082（第13図）。調査区東側北壁際で検出した。SK3135等に切られる。平面は南北に長い楕円形を呈し方位はN-19°-Wを測る。長径167cm、短径117cm、検出面からの深さ83cmを測る。底面北側に径60cmの逆台形の掘り込みがみられるが、この掘り込みはSK3082とは別遺構である可能性もある。遺物は同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、陶器甕Ⅰ類、須恵質壺、瓦器皿、土師皿、滑石片、須恵質瓦片、鉄片が出土した。13世紀中頃と考えられる。出土遺物（第16図114 ～ 118）。114・115は陶器鉢か。114は胎土は灰白色で釉は暗赤褐色を呈す。115は復元口径16.8cmを測り、黒釉を施す。116 ～ 118は土師皿である。117・118は見込み中央に静止ナデ、底部に板状圧痕を施す。

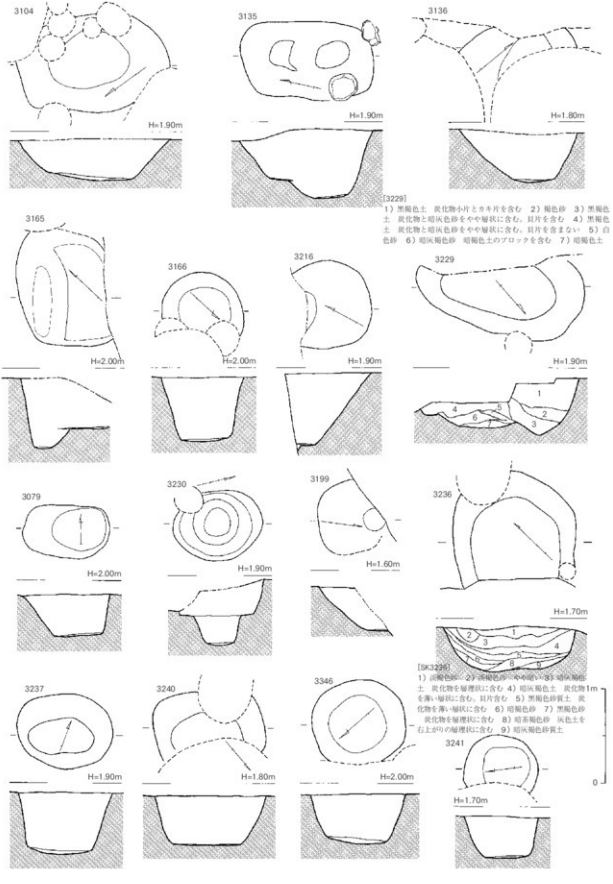
SK3103（第12図）。調査区東端部で検出した。SP3125に切られる。平面は東西に長い隅丸長方形で主軸をN-73°-Wにとる。長径177cm、短径141cm、検出面からの深さ72cmを測る。断面は半円形に近く底面は狭い。土層はレンズ状の体積を示す。1、2、3層は後世の掘り込みの柱穴状遺構である。遺構上層で礫や土器片が多く出土した。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類片、同安窯系青磁碗片、陶器甕、陶器鉢Ⅵ類、白磁碗Ⅷ類、須恵器片口鉢、須恵質瓦片（縄目圧痕）、陶器盤Ⅰ-1b類、耳壺片の他に完形に近い形で土師坏・皿が多数出土した。13世紀中頃から後半と考えられる。出土遺物（第16図119 ～ 124）。119は龍泉窯系青磁碗、120は青磁皿である。底部に線刻で文字を刻む。121・122は土師皿、123は坏、124は須恵質鉢である。復元口径24.2cmを測りる。灰色を呈し、胎土に白色砂を多く含む。

SK3104（第13図） 調査区北東側に位置しSK3103・3082に切られる。平面は東西に長く長径158cm、深さ44cmを測る。同安窯系青磁碗・皿、陶器盤、高麗青磁片、白磁碗、土師甕、鉄釘が出土した。13世紀。

SK3135（第13図） 調査区東側北壁際で検出した。SK3082を切る。平面は南北に長い長方形で主軸をN-12°-Wにとる。長径139cm、深さ72cmを測る。底面の北側にテラスがつく。遺物は多くの同安窯系青磁皿が出土した他に、白磁碗Ⅳ・Ⅷ類、白磁皿Ⅲ類、褐釉土器、須恵質甕、土師坏、土鍋片が出土した。13世紀中～後半と考えられる。出土遺物（第16図125・126）。125は土師皿で口径9.1cm、器高1.4cmを測る。見込み全体に静止ナデを施し、底部には板状圧痕がみられる。126は土鍋である。

SK3136（第13図）。調査区東端の北壁際で検出した。遺構のほとんどをSE001に切られる。推定では主軸は南北に近い方形もしくは長方形の土坑である。13 ～ 15世紀と考えられる。

SK3164（第12図）。調査区東側のSE3205の西側で検出した。北側をSK3166に切られる。平面は円形で



第13図　土坑実測図４(1/40)

径83cm、深さ84cmを測る。東西道路の範囲内に位置する。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁碗片、白磁皿Ⅸ類、白磁水柱Ⅲ-1類、陶器大甕、陶器盤Ⅰ-1b類、須恵質鉢、須恵質大甕、瓦質羽釜、土師坏、土師皿、滑石製石鍋片、鉄釘片、砥石が出土した。14 ～ 15世紀と考えられる。出土遺物（第16図127･128）。127は滑石製石鍋、128は羽釜である。外面煤付着。胎土灰褐色を呈す。

SK3165（第13図）。調査区中央東寄りの南壁際で検出した。遺構の東側はSK3164に切られ、南側は調査区外に延びる。平面は隅丸長方形と思われ、主軸をN-35°-Eにとる。現状で東西120cm、南北90cm、検出面からの深さは55cmを測る。底面西側に底面から20cmの掘り込みがある。東西道路の路面範囲内に位置しており、道路が北側にずれた時期に掘り込まれたものと考えている。遺物は同安窯系青磁碗･皿片、白磁四耳壺、白磁碗Ⅳ類、青白磁合子蓋、褐釉瓶片、須恵質瓦、須恵質甕（渥美窯か）、土師坏･皿が出土した。12世紀末から13世紀と考えられる。出土遺物（第16図129 ～ 132）。129は土師皿、130･131は土師坏、132は陶器大甕片である。土師皿･坏はいずれも見込み中央に静止ナデを施す。

SK3166（第13図）　調査区東側に位置しSK3164を切る。平面は円形を呈し径87cm、深さ67cmを測る。断面は逆台形を呈す。SK3166や3165と同様に東西道路内に位置する。遺物は同安窯系青磁碗･皿片、白磁碗Ⅴ･Ⅷ類片、陶器盤片、土師坏、砥石、獣骨が出土した。14世紀以降と考えられる。

SK3199（第13図）　調査区東側に位置し3029に切られる。12世紀か。

SK3216（第13図）　調査区東側やや北寄りに位置しSK3029に切られる。平面は円形を呈し径92cm、検出面からの深さ76cmを測る。12世紀と考えられる。

SK3229（第13図）　調査区中央部南寄りで検出した。SP3228を切る。Ⅱ区中央ベルトにかかるため全体は不明であるが、現状では平面楕円で主軸をN-38°-Wにとる。長径179cm、検出面からの深さ60cmを測る。底面は凹凸が激しい。道路の辻から南側に位置しており、南北道路に沿う土坑である。遺物は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類、同安窯系青磁碗片、褐釉陶器片、土師皿が出土した。14世紀代と考えられる。

SK3230（第13図）　調査区中央南側に位置しSD3242を切る。円形を呈し、径96cmを測る。13 ～ 14世紀か。

SK3236（第13図）　調査区中央で検出した。SK3229の北側に位置する。Ⅱ区中央ベルトにかかっており全体は不明であるが、現状からは不正円形を呈すると思われる。径129cm、検出面からの深さ49cmを測る。覆土はレンズ状の堆積で炭化物小片や貝片を層状に含んでおり、廃棄坑と思われる。道路築造前の遺構である。遺物は同安窯系青磁碗･皿、龍泉窯系青磁小片、白磁碗Ⅴ類褐釉陶器片、陶器甕Ⅳ類、須恵質鉢、土師器椀、土師器坏、鉄釘が出土した。12世紀と考えられる。

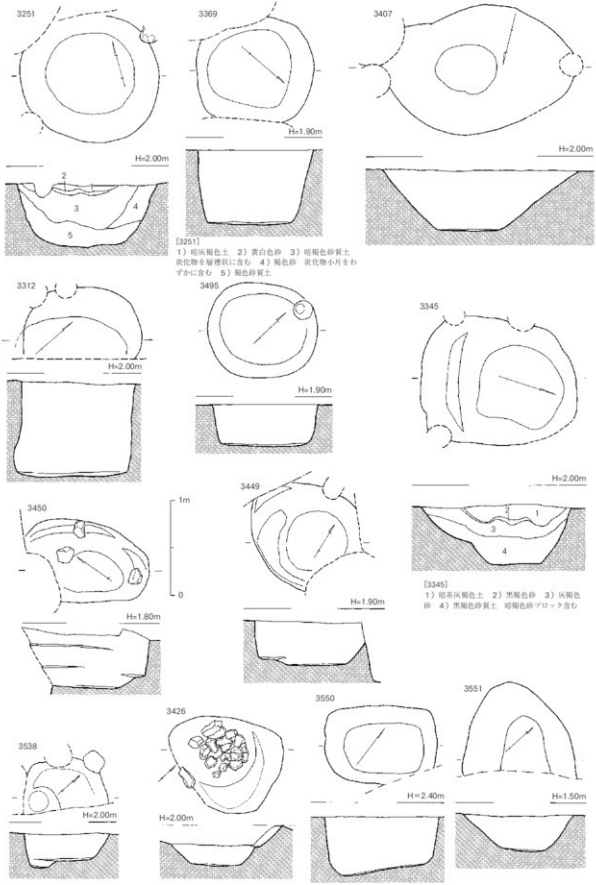
SK3237（第13図）　調査区中央やや東寄りで検出した。南北道路側溝の可能性があるSD3242を切る。平面は楕円形で主軸をN-70°-Eにとる。長径102cm、短径80cm、検出面からの深さ66cmを測る。断面は逆台形を呈す。南北道路の中央に位置する。遺物は同安窯系青磁碗片、白磁碗Ⅳ類、陶器盤片、瓦器碗片、土鍋片、土師皿･坏が出土した。13世紀である。

SK3240（第13図）　調査区中央に位置し3036に切られる。楕円を呈し長径115cmを測る。12 ～ 13世紀か。

SK3241（第13図）　調査区中央に位置し3036に切られる。円形で径76cmを測る。12 ～ 13世紀か。

SK3251（第14図）　調査区西側北辺に位置しSD3252に切られる。平面は円形を呈し径146cm、深さ66cmを測る。同安窯系青磁碗を多く含み、その他に龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅴ類、須恵質甕、陶器鉢、土師質鍋、瓦器片、土師坏･皿が出土した。12世紀末か。道路築造以前の土坑の可能性がある。

SK3312（第14図）　調査区西側の南壁沿いで検出した。遺構の1/2以上が調査区外に延びる。平面は楕円形を呈すると思われ、現状で1.26m、検出面からの深さ1.02cmを測る。遺物は同安窯系青磁碗小片、白磁碗片、褐釉陶器片、須恵器大甕片、土鍋片、褐釉陶器片、鉄釘の他に多くの土師坏･土師皿が出土した。13 ～ 14世紀と考えられる。



第14図　土坑実測図５(1/40)

SK3345（第14図） 調査区中央南寄りで検出した。SD3370や柱穴状遺構群に切られる。平面は楕円形を呈し主軸はN-18°-Wと南北に近い。長径164cm、短径133cm、検出面からの深さ66cmを測る。断面は逆台形を呈すが、底面南側に幅10cmほどのテラスがつく。遺物は同安窯系青磁碗・皿（小片多い）、白磁四耳壺片、須恵器片口鉢片、瓦器椀、土鍋、土師坏が出土した。13～14世紀と考えられる。

SK3346（第13図）。調査区中央部北壁際で検出した。道路北側側溝のSD3348を切る。平面は南北に長い楕円を呈し長径97cm、検出面からの深さ53cmを測る。遺物は青磁碗片、白磁碗Ⅳ類、土鍋片、土師坏（3～4個体分）、土師皿が出土した。中世前半と考えられる。出土遺物（第16図133・134）133は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。134は土師皿である。口径8.1cm、器高1.1cm、見込み全体に静止ナデを施す。

SK3369（第14図） 調査区中央南よりのⅡ区中央ベルト西側で検出した。平面は不整形の楕円を呈し主軸をN-89°-Wにとる。長径81cm、短径53cm、検出面からの深さ37cmを測る。断面は逆台形を呈す。出土状況は埋没途中の土坑に西側から投げ込まれたことが分かる。廃棄土坑である。遺物は同安窯系青磁碗小片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4b類、白磁碗Ⅴ類、白磁皿小片、陶器片、須恵器大甕片、須恵器鉢片、土師皿小片の他に土師坏が20枚程出土した。13世紀以降と考えられる。

SK3407（第14図）。調査区中央やや西寄りで検出した。平面は東西に長い楕円を呈し、主軸はN-75°-Eを測る。長径208cm、短径135cm、検出面からの深さ50cmを測る。断面は逆台形を呈すが底面径が64cmと狭いため急にすぼまる。主軸は南北道路側溝であるSD3456に平行する。遺物は同安窯系青磁碗片（第17図135・136）、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6a類、白磁碗Ⅴ類、白磁耳壺Ⅲ類、陶器盤（13世紀後半）、須恵器鉢、土師坏・皿片、鉄釘が出土した。13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

SK3426（第14図） 調査区西側の南寄りで検出した。平面は不正形の円形を呈し長径約1.2m、検出面からの深さ43cmを測る。検出面で径15cm前後の礫が70×50cmの範囲に面的に集中して出土しており、その石組みを外したところ、下から今度は径60cmの円形に礫がまとまって出土した。柱の根石か。周囲では同じような遺構は確認できなかった。遺物は土師坏片と須恵器小片のみである。SK3390と3427に切られていることから13世紀代と考えられる。

SK3428（第5図） 調査区南西隅で検出した。SK3426と3427に切られる。同安窯系青磁碗・皿、瓦器椀、陶器片、土師坏・皿（糸切り）が出土した。12～13世紀である。出土遺物（第17図140～143）。140は龍泉窯系青磁皿、141は同安窯系碗片、142は瓦器椀底部、143は土師坏である。復元口径14.8cmを測る。

SK3449（第14図）。調査区西端の北壁際で検出した。攪乱とSK3450に切られる。平面形はわずかに楕円形を呈し径108cm、検出面からの深さ48cmを測る。底面は西側に三日月状のテラスを持つ。遺物は白磁皿片、同安窯系青磁碗片、白磁Ⅸ類、陶器小片、須恵器片、青磁片、瓦器鉢、須恵質鉢、土師坏・皿片が出土した。14世紀代か。出土遺物（第17図151～154）。151は須恵質鉢、152は陶器四耳壺、153は龍泉窯系青磁小碗、154は土師皿である。153は復元口径10.6cm、154は口径8.7cm、器高1.0cmを測る。

SK3450（第14図） 調査区西北端に位置し3449を切る。深さ63cmを測る。14～15世紀か

SK3467（第5図） 調査区中央やや北寄りで検出した。平面円形を呈し径93cm、深さ120cmを測る。同安窯系青磁片、龍泉窯系青磁Ⅱ・Ⅲ類、白磁Ⅲ・Ⅸ類、火鉢、須恵質大甕片、陶器瓶などが出土した。14世紀か。出土遺物（第17図155・156）。155は白磁Ⅲ・Ⅸ類、156は龍泉窯系青磁碗Ⅲ類である。

SK3484（第5図） 調査区中央部で確認した道路面である。東西道路側溝のSD3456とSD3352に挟まれたおおよそ3×1mの範囲に同安窯系青磁碗の破片がまとまって出土した。西側では道路側溝のSD3272が切れており、道路南側敷地への入口であった可能性がある。青磁碗の破片は立ち上がったSD3272から東側に伸びる深さ4～6cmの掘り込みの中に敷いたような状態で出土した。破片としては底部の高台部分を含む大きな破片が多い。取り上げた遺物はほとんどが同安窯系青磁碗の破片であるが、

その他に陶器盤小片と陶器鉢片が数点出土した。12世紀末～13世紀である。

SK3495（第14図） 調査区中央で検出した。東西道路側溝であるSD3456や道路面のSK3484を切る。平面は東西に長めの楕円形を呈し、主軸をN-52°-Eにとる。長径116cm、短径99cm、検出面からの深さ45cmを測る。断面は箱形を呈す。遺物は同安窯系青磁碗・皿小片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2a類、四耳壺、陶器盤、須恵器大甕片、滑石製石鍋片が出土した。13世紀中～後半と考えられる。出土遺物（第17図157～161）。157・158は青磁碗。159は陶器壺底部、160は滑石製石鍋、161は土師皿である。

SK3538（第14図） 調査区西端の南壁際で検出した。SK3376・SD3438に切られる。平面形は長方形を呈すと思われ、現状で径90cm、深さ28cmを測る。底面南隅に円形の窪みがある。SD3438に切られることから12世紀後半～13世紀と思われる。

SK3550（第14図）調査区の東端で検出した。道路築造以前の土坑である。現状で長径120cm、短径82cm、深さ52cmを測る。遺物は出土していない。

SK3551（第14図） 調査区の東端で検出した。道路築造以前の土坑で主軸をN-49°-Wにとる。深さ36cmを測る。遺物は出土していない。

⑹土師皿出土遺構 完形に近い土師皿・坏が1枚から複数枚出土した柱穴状遺構もしくは土坑である。土坑は廃棄土坑と思われるが柱穴状遺構の中には建物解体時の祭祀などもある可能性がある。

SP1109（第20図） 調査区の東側で検出した。円形の土坑で土師坏が上下合わせで出土した。出土遺物（第21図178・179）。178が口径10.03cm、器高2.4cm、179が口径10.2cm、器高2.1cmを測る。他の遺物は備前擂鉢（15世紀中頃）、瓦質瓦片、火鉢片、土師質瓦片、高麗青磁片、青磁碗小片、土鍋、鉄片が出土した。15世紀中頃か。

SP2018（第20図） 調査区の東端部で検出した。掘方の平面は円形を呈し径45cm、深さ19cmを測る。断面は逆台形を呈す。底面から浮いた状態で礫と土師坏2枚と土師皿が出土した。出土遺物（第21図180～182）。180が口径13.8cm、器高3.0cm、181が口径12.7cm、器高2.6cm、182は口径8.3cm、器高1.6cmを測る。その他の遺物としては同安窯系青磁碗小片、石玉が出土した。14～15世紀か。

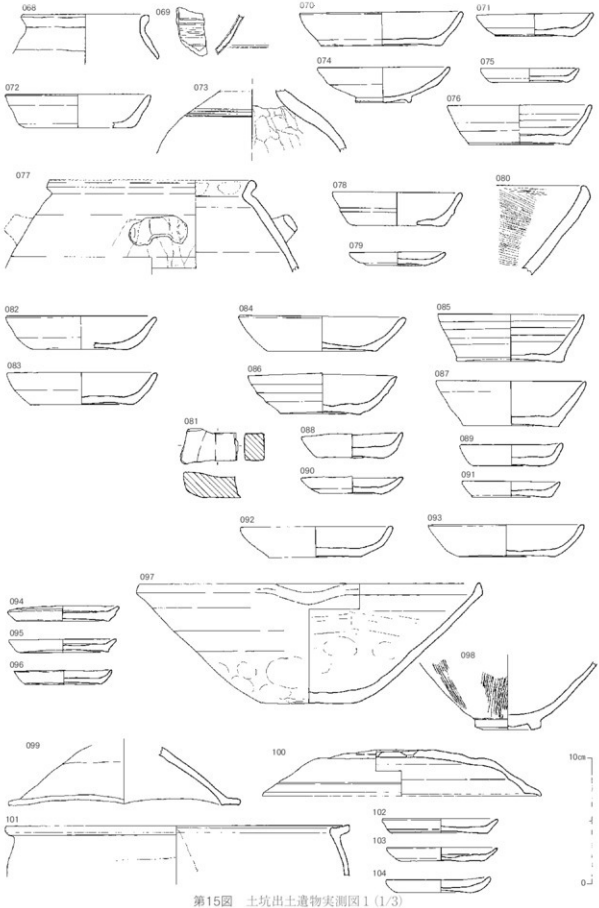
SK2032（第20図） 調査区の東端で検出した。SK2030・2031・SE2052に切られる。3方を切られ、全体の形は不明である。深さ7cmを測り、覆土中から土師皿と坏が出土した。土師皿の中には灯明皿も出土している。遺物は土師皿の他に同安窯系青磁碗小片が出土した。出土遺物（第15図070・071）。口径、器高は070は13cm、2.6cm、071は9.2cm、1.3cmで、どちらも見込み全体に静止ナデを施す。14～15世紀か。

SK2037（第20図） 調査区中央の北壁寄りで検出した。平面は東西にやや長い楕円を呈し主軸をN-70°-Wにとる。長径74cm、検出面からの深さ6cmを測る。底面中央に径40cm、底面からの掘り込み4cmの掘り込みがある。1段目底面の壁際で完形の土師坏が1枚出土した。出土遺物（第21図162）。口径8.7cmcm、器高1.9cmを測る。灯明皿として使用されている。中世後半と考えられる。

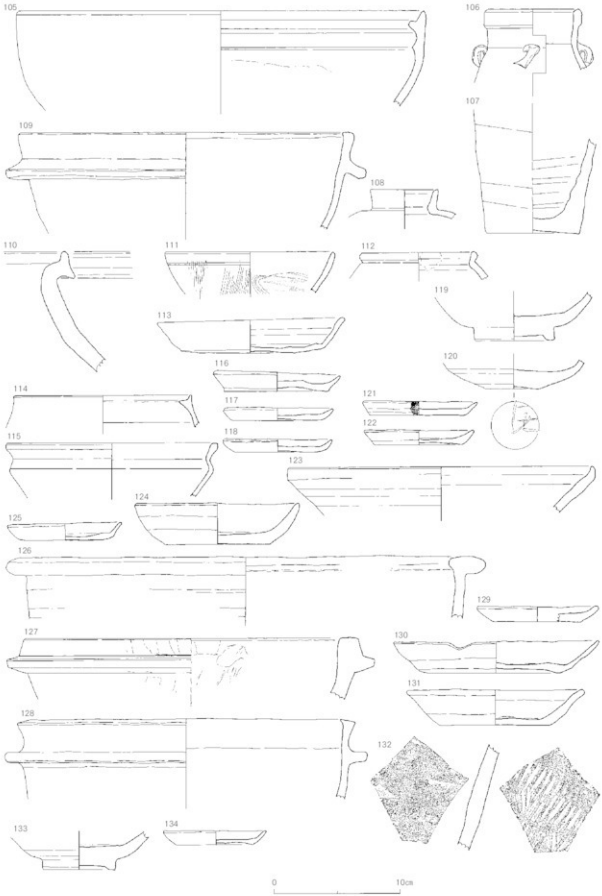
SP2039（第20図） 調査区中央やや東寄り、SK2037の東側で検出した。平面円形で径34cm、深さ9cmを測る。土師坏が1枚出土した。出土遺物（第21図184）。口径12.6cm、器高2.9cmを測る。

SK2060（第20図）。調査区中央部北辺に位置し主軸をN-78°-Eにとる。平面は東西に長い隅丸長方形で長径133cm、深さ27cmを測る。底面は緩やかに東側に傾斜する。底面から13cm浮いた状態で土師皿が1枚出土した。遺物は土師皿の他に龍泉窯系青磁碗Ⅱ類、同安窯系青磁碗小片、土師坏小片、瓦器片が出土した。13～14世紀と考えられる。出土遺物（21図185・186）。185は口径12.7cm、器高2.7cm、186は口径12.1cm、器高2.5cmを測る。見込みには静止ナデ、底部には板状圧痕がみられる。

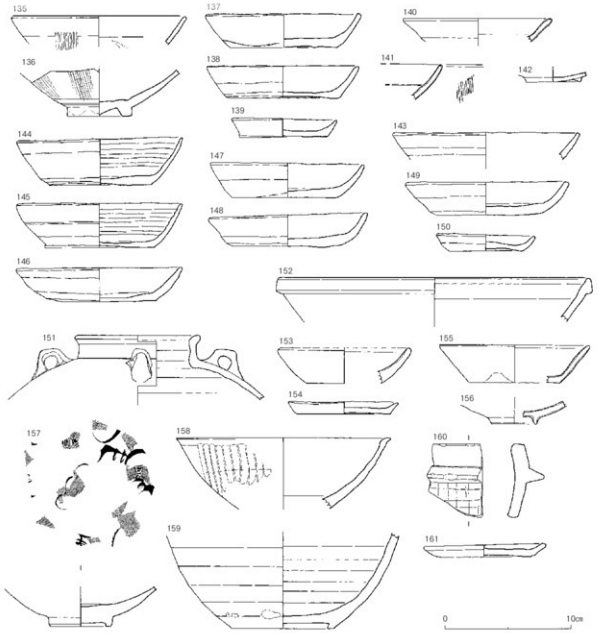
SK2061（第20図）。調査区東側北寄りで検出した。1面から2面に掘下げ中に確認した炉である。炉は径26cm、中央の窪みは深さ6cmを測る。厚さ3cmの焼土壁の内側に薄い白色土と暗橙色土を貼っている。



第15図　土坑出土遺物実測図１(1/3)



第16図　土坑出土遺物実測図２(1/3)

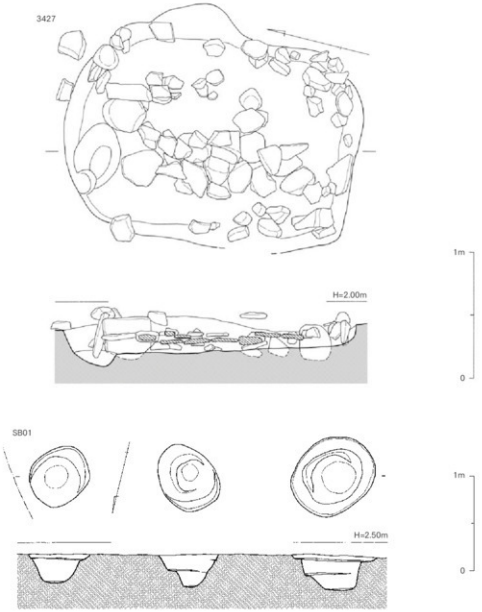


第17図　土坑出土遺物実測図３(1/3)

炉の直下で土師皿が２枚重なった状態で出土した。出土遺物（第21図163 ～ 169）。163 ～ 169は土師皿である。いずれも見込みには静止ナデを施し、約半分の底部に板状圧痕がみられる。

SK2063（第10図）　調査区中央の北辺で検出した土坑でSD2061を切る。平面は楕円形で主軸をN-56°-Eにとる。長径143cm、検出面からの深さ50cmを測る。遺物は白磁碗Ⅷ類、須恵質片口擂鉢、鉄釘、陶器片、土師椀・坏片、土師質鍋が出土した。14 ～ 16世紀と考えられる。

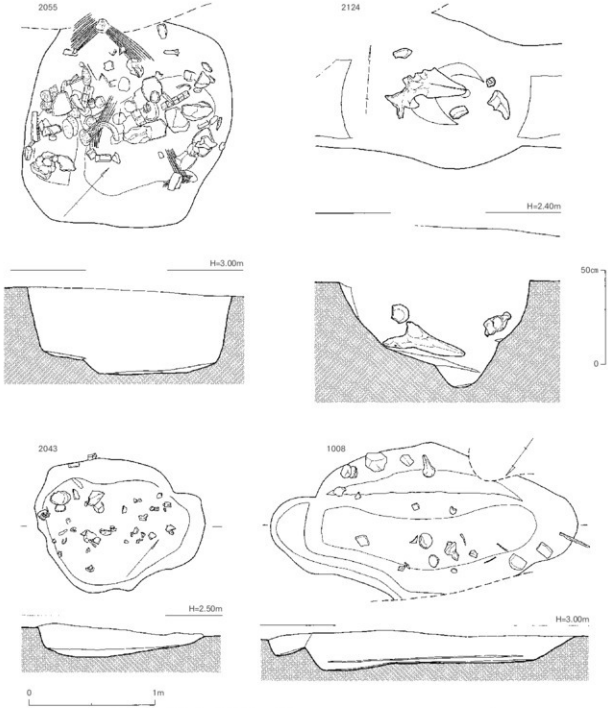
SK2127（第20図）。調査区西側で検出した。平面は南北に長い不整形の楕円を呈し主軸をN-40°-Wにとる。長径166cm、短径97cm、検出面からの深さ14cmを測る。遺構の北西隅から土師坏がまとまって出土した。遺物は他に龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、高麗青磁片、白磁Ⅷ類片、陶器鉢、瓦質擂鉢、瓦質瓦、滑石製石鍋片が出土した。14 ～ 16世紀と考えられる。出土遺物（第21図170）は染付けである。



第18図　SK3427・SB01実測図（SK3427は1/30、SB01は1/40）

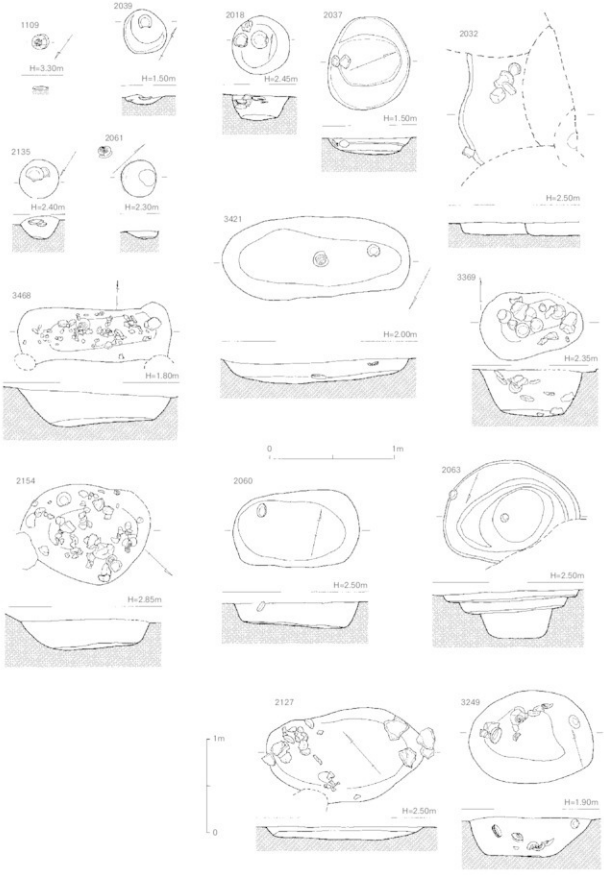
SP2135（第20図）。調査区西側で検出した。平面は円形で径30cm、深さ18cmを測る。断面は逆台形を呈す。底面から10cm程浮いた状態で土師皿と坏が出土した。出土遺物（第21図171 ～ 174）。171 ～ 173は土師坏、174は土師皿である。171は口径14.2cm、器高3.1cm、172は口径13.1cm、器高3.1cm、173は13.3cm、器高3.1cm、174は口径9.0cm、器高1.5cmを測る。174にのみ見込みに静止ナデがみられる。遺物は他に龍泉窯系青磁碗Ⅱ類片と白磁片が出土している。13世紀以降と考えられる。

SK2154（第20図）。調査区西端で検出した。平面は長径102cm、短径78cmの楕円形を呈し、方位はN-44°-Wを測る。深さは30cmを測る。検出面から底面の全体で土師坏・皿の破片と径10cm程の礫が出土した。出土遺物は土師坏・皿の他に同安窯系青磁碗小片、須恵器小片、陶器片、瓦器鉢片、土師坏は破片も含めると40 ～ 50枚を数える。13世紀の遺物が多い。出土遺物（第15図084 ～ 091）。084 ～ 087は土師坏、088 ～ 091は土師皿である。085 ～ 087は轆轤巻き上時のナデが強く残る。



第19図　廃棄・祭祀遺構実測図(2055・2124は1/20、2043・1008は1/30)

SK3249（第20図）。調査区中央やや西寄りで検出した。東西道路南側側溝であるSD3456を切る。平面は楕円形を呈し主軸をN-73°-Wにとる。長径97cm、短径73cm、深さ31cmを測る。覆土中から破損した土師坏が8枚程出土した。出土状況からは土坑が埋没途中に投げ込まれたことが分かる。廃棄土坑と思われる。遺物は他に同安窯系青磁碗小片、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、須恵器大甕片、陶器片が出土している。13世紀代と考えられる。出土遺物（第17図144 ～ 150）。144 ～ 149は土師坏。150は土師皿である。150は見込み全体、土師坏は見込み中央部分に静止ナデを施す。



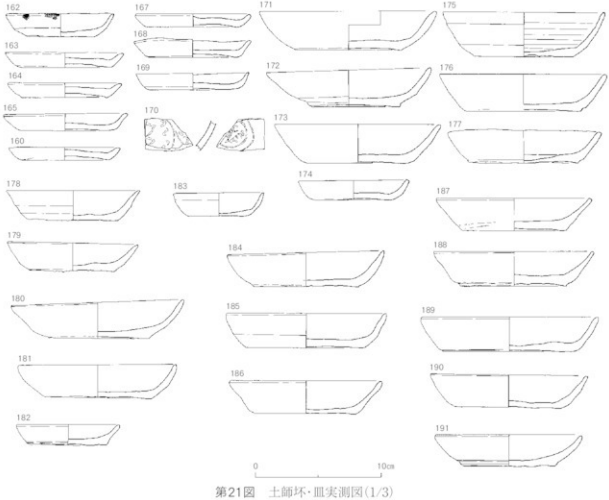
第20図　土師皿出土遺構実測図(1/30、2063・2127は1/40)

SK3369（第20図） 調査区中央南側に位置し3359・3370に切られる。平面楕円形を呈し長径82cm、深さ36cmを測る。底面で１枚、上面で６枚の土師坏が完形に近い状態で出土した。その他同安窯系青磁碗、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、須恵器大甕片、須恵器鉢と土師皿片（20枚分程度）が出土した。13世紀か。

SK3382（第５図） 調査区西端の南側で検出した。平面は不整形の楕円を呈し、主軸をN-50°-Eにとる。長径79cm、短径58cm、深さは約20cmを測る。土師坏が５枚と礫が出土した。遺物は土師坏以外に龍泉窯系青磁碗Ⅰ-４b類、同安窯系青磁碗小片、土鍋片、土師皿が出土した。13世紀と考えられる。

SK3421（第20図） 調査区中央に位置し東西道路側溝のSD3456を切りながら平行する。平面は東西に長い楕円形で主軸をN-63°-Eにとる。長径149cm、幅64cm、深さ20cmを測る。土師坏が2枚出土した。SD3456に沿うSK3369やSK3249からは完形に近い土師坏や土師皿が出土しており、これらは東西道路に沿って建てられた建物に関係する遺構と考えられる。遺物は土師坏の他に同安窯系青磁碗・皿片、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、茶褐釉陶器片、常滑窯甕口縁、須恵質甕片、土師皿片（多数）が出土した。13世紀後半と考えられる。出土遺物（第17図137 ～ 139）。口径と器高は137は12.3cm、2.6cm、138は12cm、2.5cm、139は8.3cm、1.5cmを測る。137と139は見込み中央に静止ナデを施す。137・138は板状圧痕がある。

SK3468（第20図） 調査区中央部西寄りで検出した。東西道路の側溝SD3456の南側に沿う。平面は東西方向に長い長方形を呈し、主軸はN-87°-Eにとる。長径120cm、幅41cm、深さ31cmを測る。底面は東側に向けて傾斜する。検出面とほぼ同じ高さで完形の土師坏の他に土師皿・坏の破片が多く出土した。



第21図 土師坏・皿実測図(1/3)

出土遺物は同安窯系青磁碗片、白磁水柱口縁、褐釉陶器、須恵器鉢が出土した。中世前半と考えられる。出土遺物（第21図189～191）。189は口径14.1cm、器高2.7cm、190は口径12.5cm、器高2.6cm、191は口径10.6cm、器高2.4cmを測る。いずれも見込み中央部に静止ナデを施し、板状圧痕がみられる。

(7)廃棄土坑・祭祀土坑　廃棄土坑のうち動物遺存体が多く出土した遺構をまとめて報告する。

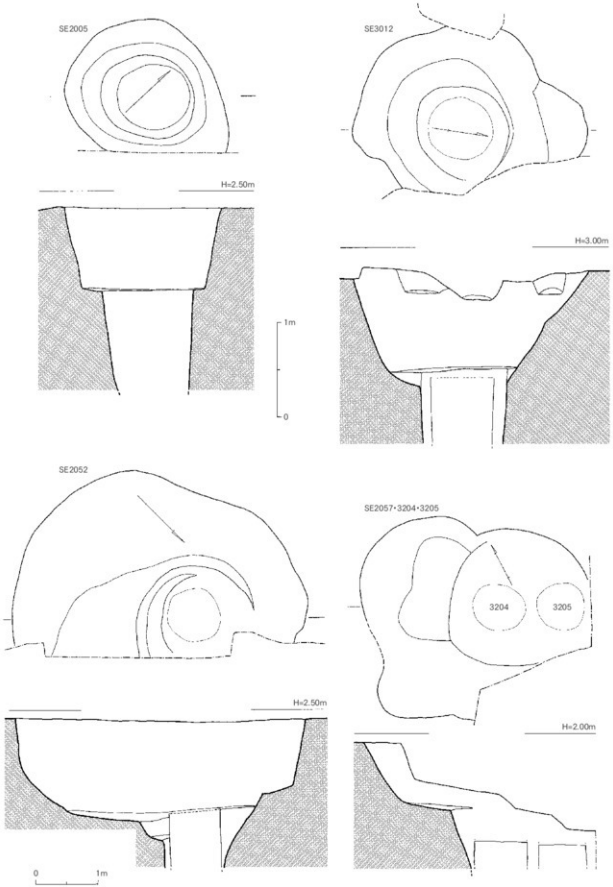
SK1008（第19図）　調査区中央部で検出した。形状は不明瞭であるが、東西方向の溝状の土坑で主軸をN-54°-Eにとる。現状で長さ2.4m、幅1.25m、検出面からの深さ33cmを測る。遺物は褐釉陶器片、土師坏・皿、陶磁片、鉄片のほかにアカニシ、アワビ、海獣類上腕骨などが出土した。中世後半と思われる。

SK2043（第19図）　調査区中央部東寄りで検出した。平面は不整形な楕円を呈し、主軸をN-50°-Eにとる。長径132cm、短径106cm、検出面からの深さ24cmを測る。覆土中から礫や土師坏の破片と共に殻長20cm弱のアワビやイルカ類など食料残滓が多く出土した。遺物は同安窯系青磁碗小片、須恵器鉢片、須恵質瓦片、土師質片口鉢、土師坏片が出土した。13～15世紀と考えられる。

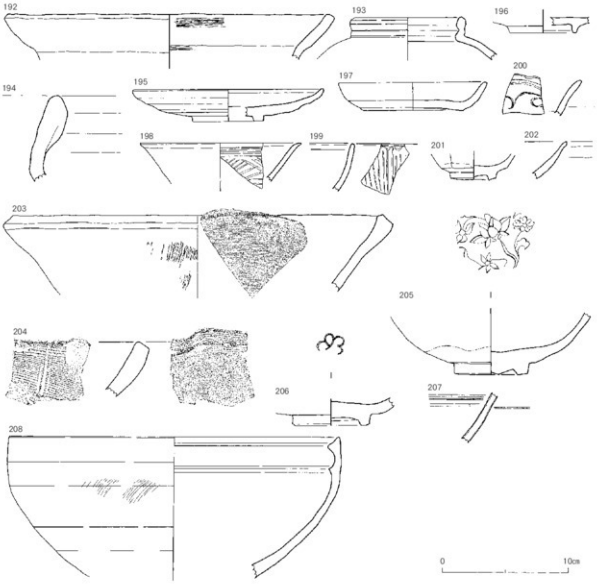
SK2055（第19図）　調査区の中央東寄りで検出した。SK2043とSD2060に切られる。平面はやや隅丸の菱形を呈し、主軸はN-36°-Wを測る。長径115cm、短径106cm、検出面からの深さ46cmを測る。覆土中から大量の動物遺存体（哺乳類、魚類、貝類）が出土した。哺乳類はイルカ類（下顎、頸椎、椎骨）、イヌ（頭蓋骨）の他、イノシシ（頭蓋骨）などが出土した。イルカ類の椎骨は3～5個ほど連結した状態で出土し、魚類はマグロもしくはカジキマグロ類と思われる尾鰭が数匹分出土した。図版11－7は尾鰭の写真で左側の鰭がきちんとでていないが本来は左右対になっている。このように上下揃ったものは1匹分のみで後は上下分かれた状態で出土している。あとは小型の魚類も多く出土しており、図版11－8はその出土状況である。まだ種の同定を行っていないが小型魚類（10～20cm前後）で、椎骨がなく頭の部分の骨がほとんどである。解体時に頭を切り離したものであるが、出土状況からすると個別に別れておらず、全体が混じり合って出土したことから、魚の頭だけをまとめたアラ鍋等の利用が想像される。貝類はアワビとイガイ、大型のアカニシとカキ・ハマグリが出土した。アワビは殻長20cm程度である。イガイは殻長10～11cm程度のものがまとまって出土した。カキは殻長9cm、ハマグリは8cmを越え、周辺の遺構に比べ大型である。当初大型魚類の尾鰭が目立ったため、当時の海岸線に近い本調査地点に魚の解体場があって、大型魚類は解体して身だけを街中に運び込んだのではと考えたが、その後多種の動物遺存体が出土したことから、宴会の料理を作るときにでた残滓の廃棄土坑である可能性が高いと考えている。マグロもしくはカジキマグロ類は現在でも壱岐や対馬近辺が主な漁場となっており、ここで出土した骨もそこで捕獲されたものであろうか。遺物は白磁Ⅲ区類、白磁碗Ⅴ類、同安窯系青磁碗小片、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、高麗青磁片、陶器大甕、瓦器鉢、土師皿・坏片、羽口、移動式竈片が出土している。14世紀代と考えられる。

SK2124（第19図）。調査区の中央部西より北壁際で検出した。東西道路側溝であるSD2191の一部であるが、側溝底面を径1.0m×0.7mの範囲で土坑状に掘り下げている。土坑内からイルカ類の頭蓋骨が出土した。頭蓋骨は後頭部が割れており、その一部が土坑東端から離れて出土していることから、土坑に廃棄する前に後頭部を割っており、それは脳を食料等に利用するためであると思われる。また、他の廃棄土坑と異なってわざわざ道路の側溝を掘り下げて埋めていることから通常の食料残滓の廃棄ではなく、祭祀を行うために埋めた可能性が考えられる。遺物は土師坏が2枚出土した。溝の年代から14世紀と考えられる。出土遺物（第15図082・083）土師坏である。083は内面に墨痕跡がある。

(8)井戸　近世～近代を含め井戸を7基確認した。井戸は主に調査区東側に集中するが1基のみ調査区西側で石組み遺構であるSK3427の下で確認した。調査区内最古の井戸の可能性があり、また道路南側敷地



第22図　井戸遺構実測図(2005・3012は1/40、2052・3204・3205は1/60)

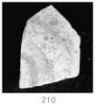


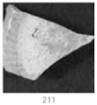
第23図　井戸出土遺物実測図(1/3)

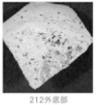
内建物に付随する可能性があったが、調査期限の問題などから最下層まで掘り下げることができなかった。

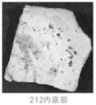
SE2005（第22図）。調査区東側の南壁寄りで検出した。SE2057を切る。遺構の南半が調査区外に延びるが平面形は東西に長い楕円を呈す。長径4.12m、検出面からの深さ1.8mを測る。井筒自体は遺存していなかったが土色から径は60cm程と思われる。標高0.6mで湧水が激しくなり、それ以下の掘り下げは中止した。遺物は掘方から同安窯系青磁碗小片、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類、白磁碗Ⅷ類、白磁皿Ⅸ類、黒釉片、須恵質擂鉢、陶器甕、備前甕片、滑石片が出土し、井筒内からは同安窯系青磁碗小片、瓦片（縄目タタキ）、茶褐釉大甕片、土師質鉢、天目小片、滑石片が出土した。また、その他に見込みに金が付着した白磁碗片（第24図242）や動物遺存体（イルカ類椎骨、骨角器破損品、骨角器製造関連廃材）が出土している。特に骨角器製造に関連する廃材が出土していることからこの周囲に骨角器の生産工房が存在した可能性がある。金付着白磁片に関しては福岡市立埋蔵文化財センターの分析結果と共にP38に記載している。井戸の時期は出土遺物から14世紀後半と考えられる。この井戸は東西道路の南側側溝の延長上

博多165次出土墨書土器

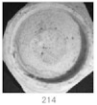

210

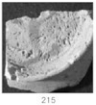

211

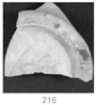

212外底部

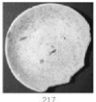

212内底部

213

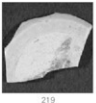

214

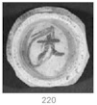

215

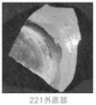

216

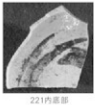

217

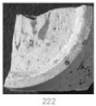
218

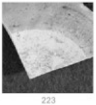

219

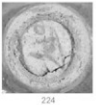

220

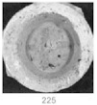

221外底部

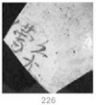

221内底部

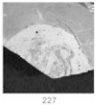

222

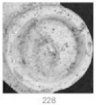

223


224

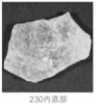

225

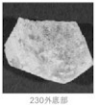

226


227

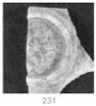

228

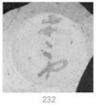
229

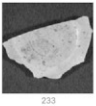

230内底部

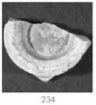

230外底部

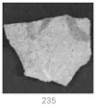
230坏部外面

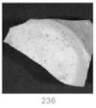

231

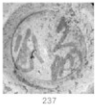

232

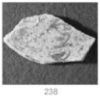

233

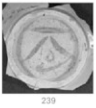

234

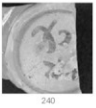

235


236


237


238


239

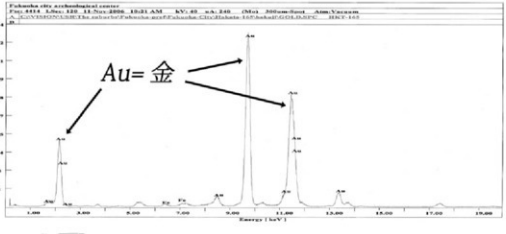

240

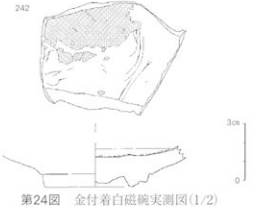
241

表１　博多165次出土墨書土器一覧

遺物番号	出土遺構	墨書	土器	部分	時期
210	1006	不明	白磁小碗	外底部	
211	1113	不明	同安窯系皿	外底部	12世紀中～後半
212	2025	不明	土師皿	底部内外両面	
213	2036	記号	白磁皿Ⅲ類か	外底部	12世紀中頃
214	2042	不明（かすかな痕跡のみ）	青磁碗	外底部	14世紀か
215	2052井筒	不明	白磁碗Ⅴ類	外底部	11C後～12世紀前半
216	2057	花押か	白磁水注	外底部	11～13世紀
217	2124　実測番号082	墨痕のみ	土師坏	内底部	
218	2138	「三」もしくは「川」？	同安窯系青磁碗	外底部	12世紀後半
219	2186	花押か	同安窯系皿	外底部	12世紀中～後半
220	3029	「大」と花押	白磁碗底部	外底部	12～13世紀
221	3049	内外面無釉の部分に墨付着	白磁碗底部	周面	
222	3065	不明（平仮名か）	白磁碗底部	外底部	
223	3135	不明	同安窯系皿	外底部	12世紀中～後半
224	3141外側茶褐色土	不明	白磁碗A群	外底部	13～14世紀
225	3250	「＋」	同安窯系青磁碗	外底部	12世紀中～後半
226	3362	久方（大）　僧	白磁皿Ⅶ-1a か	外底部	11世紀後半～12世紀前半
227	3456	不明（漢字1文字）	同安窯系皿	畳付き	12世紀中～後半
228	3495	不明（記号か）	同安窯系白磁碗	外底部	12世紀後半
229	3495	「又」	白磁皿Ⅲ類か	底部外面	12世紀中頃
230	3503	外底部　文字　内面見込み　墨付着か	土師坏	底部周囲	
231	Ⅰ区1面清掃時表採	不明（漢字1文字）	白磁小碗	外底部	
232	Ⅰ区2～3面掘り下げ	「□こゆ」か	同安窯系皿	外底部	
233	Ⅰ区2～3面掘り下げ D土（黒褐色斑混じり）	不明	龍泉窯系青磁皿	外底部	12世紀中～後半
234	Ⅰ区2～3面掘り下げ D土（黒褐色斑混じり）	不明	同安窯系青磁碗	外底部（高台外側にも墨付着）	
235	Ⅰ区3面検出時表採	不明	陶胎盤	外底部	11世紀後半～12世紀前半
236	東南 鳴整地層41・42層（土坑埋土）	不明	同安窯系皿	外底部	12世紀中～後半
237	Ⅱ区1～2面掘り下げ	「久□」と花押か	白磁碗Ⅳ類	外底部	11世紀後半～12世紀前半
238	Ⅱ区1～2面掘り下げ	一部のみ遺存，平仮名3文字か	土師坏	内底部	
239	Ⅱ区第5焼土面～第6焼土面間整地層	頭もしくは記号か	白磁碗底部	外底部	
240	Ⅱ区2～3面間包含層	か□（平仮名2文字か）	龍泉窯系青磁碗Ⅰ類	外底部	12世紀中～後半
241	Ⅱ区2～3面間包含層	不明	白磁皿Ⅶ類か	外底部	12世紀中～後半

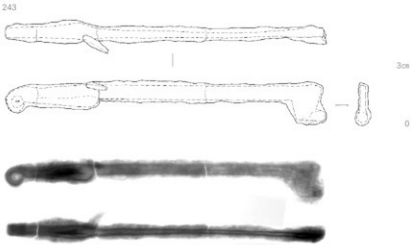
表２





第24図　金付着白磁碗実測図(1/2)
アミは金付着部分

に位置しており、この井戸が掘られた時期には道路は北側に移動していたか、廃絶したものと思われるが、土層断面ではこの井戸が埋まった後、その上層に道路状遺構と思われる整地層を確認したため、井戸が廃棄された後は再び道路として使用されたことが分かる。出土遺物（第23図192～197）。192は土師質鍋、193は陶器壺、194は陶器大甕口縁、195は陶器皿、196は青磁碗底部、197は土師坏である。



第25図　鉄製品実測図(1/2)

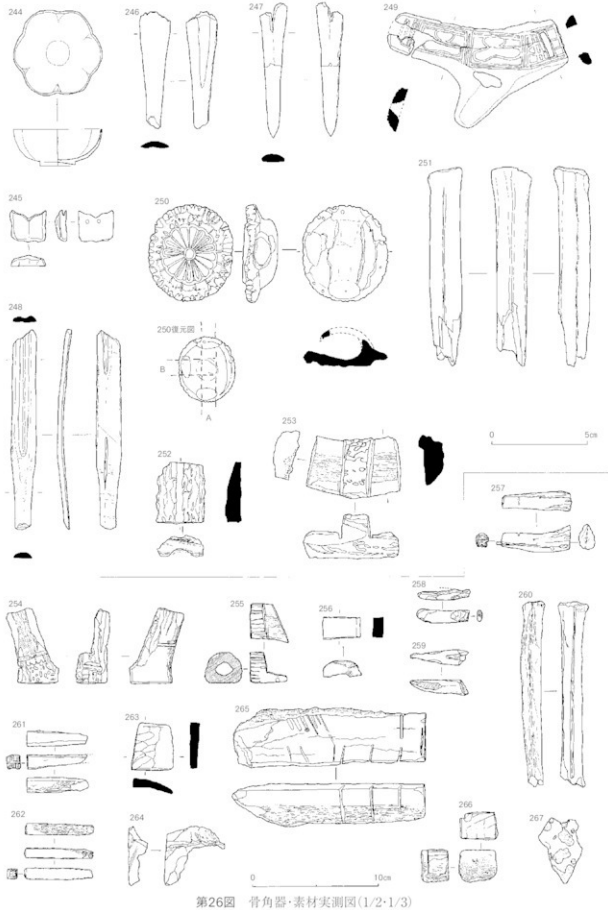
SE2052（第22図）。調査区東端で検出した。SE3012を切る。遺構の東半分は調査区外に延びる。掘方の南北径4.7mを測る。検出面からの深さ1.6mまで掘り下げた後、径90cmの井筒を確認し、掘り下げた。井筒部分は掘方底面から更に80cmの深さまで下げたが標高0.4m前後で湧水点に達し、その後湧水の勢いが強くなったため底面までは達しなかった。遺物は掘方から須恵質丸瓦、須恵甕片、陶器瓶、瓦器片口鉢、須恵質擂鉢、陶器盤Ⅰ－1ｂ類（13c前）、白磁皿Ⅸ類片、龍泉窯系青磁Ⅰ類碗片、龍泉窯系青磁Ⅱ類碗片、龍泉窯系青磁雷文（15ｃ）、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類（13ｃ中頃～14ｃ初め）、龍泉窯系青磁輪花小碗、同安窯系青磁碗・皿片、白磁碗Ⅳ類、白磁水注、イルカ第1頭椎、滑石片、陶器大甕片、鉄滓、黒釉壺、白磁碗片、天目碗片、青磁盤片、三島手片、染付片、滑石製石鍋（14ｃ）、瓦片、瓦質鉢、土壁（木舞孔有り）、石球（径4.6cm）が出土し、また井筒から瓦、白磁碗Ⅴ類、同安窯系青磁小片、須恵質擂鉢、青磁碗片が出土した。14世紀後半から近世前半と考えられる。出土遺物（第23図198～202）。198は磁器碗、199・200は青磁碗、201は白磁八角小鉢である。見込みに目跡あり。202は黒釉碗小片である。

SE2057（第22図）。調査区東側で検出した。SE2005に切られており、全体の形は不明であるが、推定で径4.5m前後と考えられる。検出面から1mほど掘り下げたのち、径68cmの井筒部分のみ掘り下げている。井筒を2基確認したため井戸とは別に3204と3205の番号を付けた。遺物は井筒3005から白磁碗Ⅴ・Ⅷ類、同安窯系青磁碗・皿片、陶器鉢Ⅰ-1b類、褐釉陶器鉢片、土師皿が出土した。井筒3204は壁の崩落の危険性のため掘り下げることができなかった。13世紀末～14世紀であろうか。出土遺物（第23図203～207）。いずれも2057（掘方）から出土した。203は瓦質鉢、204は瓦質の擂鉢である。205は白磁碗で見込みに蓮華文を描く。206・207は青磁で206は見込みに梅花文を描き、207は両面に象嵌を施す。

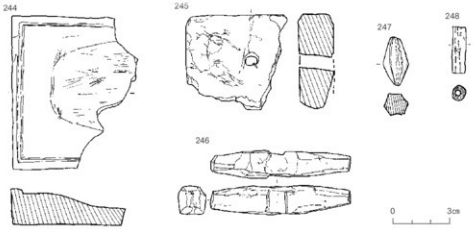
SE3012（第22図）。調査区の東端で検出した。SE2052に切られる。掘方は円形を呈し径2.0mを測る。検出面からの深さ1.2mまで断面逆台形に掘り下げ、そこから径0.9mの井筒掘方部分を掘り下げた。井筒は径65cmを測り、掘方底面から更に60cm以上掘り下げている。標高0.9mで湧水が激しくなったため底面まで掘り下げることはできなかった。遺物は掘方から同安窯系青磁碗・皿片、須恵質大甕片1点、土師皿・坏片、土鍋片、瓦器椀小片、陶器甕（13ｃ）、鉄片、土師質大甕片、白磁皿Ⅸ類、陶器盤片が出土し、井筒内から同安窯系青磁碗片、青白磁片、須恵質甕片、滑石片、土師皿片が出土した。13～14世紀と考えられる。出土遺物（第23図208）は陶器鉢Ⅰ－1ｂ類である。

(9)石組み遺構　調査区西側で1基のみ検出した。

SK3427（第18図）。SK3426を切る。平面は南北に長い隅丸長方形で主軸をN-13°-Wにとる。長径2.3m、短径1.95m、検出面からの深さ35cmを測る。後世の攪乱でかなり壊されているが、掘方中央部分では径1.5×1.0mの範囲に径20～30cmの板石を掘方底面から7～10cm程浮いた状態で敷いている。また北側以



第26図　骨角器・素材実測図(1/2・1/3)



第27図　石製品実測図(1/2)

外の各壁際では掘方底面から５～10cmほど掘り込んで板石を立てて壁としている。壁の板石は１段のみで２段目は確認できなかったがこれは後世の攪乱のため破壊されたものと思われる。北側については壁の板石等は確認できなかったが、こちら側には大きな攪乱もないため、元々なかったものと思われる。遺構の性格としては石敷きの土間や周辺の調査区でよく見られる石組み遺構の一種である可能性が考えられる。遺物は須恵器高台付壷、陶器甕、土師質鉢、須恵質大甕、鉄釘、常滑壷（13c中頃）、陶器壺Ⅳ類（13c中頃～後半）、土師坏小片（糸切り）、瓦器椀、滑石片、白磁碗Ⅴ類口縁、同安窯系青磁碗・皿片、羽釜片、茶褐色陶器片、陶器耳壺Ⅴ－１類、須恵器鉢（14c）、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁皿が出土した。13中頃～14世紀と考えられる。

(10)その他の出土遺物

1)墨書土器（表１・PL1）　全部で32点が出土した。このうち白磁碗が10点、白磁皿が3点、青磁が12点、陶器盤底部が1点、土師坏・皿が３点である。墨書された土器は11世紀後半から12世紀が多い。

2)金付着白磁碗（第24図242）　SE2005井筒最下部から出土した白磁碗の底部で、14世紀前後と思われる。見込みに金が付着しているが、福岡市立埋蔵文化財センターでの分析では純金に近い状態であることが判明した（グラフ1)。実体顕微鏡による観察では金の表面にはわずかに凹凸がみられ、端部では徐々に薄くなり途切れる状態が観察できる箇所もある。また部分的にではあるが表面にナデ状の痕跡がみられることから金箔ではなく、金泥の可能性が高いのではないかと思われる。現在金が付着するのは4×2cmの範囲であるが、全体に金の痕跡が残っており、一時的には全体に金が付着していたと思われる。これらのことや金が滴状にみえる箇所があることなどから、これは白磁碗の装飾ではなく、金製品などを作る工房でパレットとして使用していた可能性がある。骨角器の未製品なども出土しているため、それらとともに何らかの工房で装飾用に使用されていた可能性が考えられる。

3)金属製品　243（第25図）は鉄製の鍵である。長さ16.9cm、断面長方形の棒状で、左端は輪状になり、もう片方はL字状に曲がる。先端に小さな突起がつく。左端から1/3の所に細い金属製の棒が突き出す。取手を固定させる目釘か。左端の輪は紐を通す為か鞘などの取手に目釘を通す為のものであろうか。2175から出土した。14～15世紀と思われる。244（第26図）は銅製の小碗である。坏部は輪花をなす。径4.7cm、高さ1.95cm、重さ31.1gを測る。博多遺跡で以前内側に紅が付着したものが出土しており、紅入れと考えられる。SK2050（14世紀）から出土した。245（第26図）は青銅製の銙尾である。長さ1.65cm、幅1.9cm、重さ3.56gを測る。2097（14～15世紀）から出土した。

4)骨角製品（第25図）。骨角器が5点出土した。246～248は笄である。いずれも欠損している。248は幅

1.35cm、遺存長10.4cmを測る。249は鹿角製で枝角の分岐部を利用した骨角製品である。長さ9.7cmを測る。両端と枝角付け根に穿孔し、止具として使用している。穴は両端がきっちりとして長方形なのに対し枝角付け根のはやや楕円形を呈す。軸部分に線刻がある。13世紀後半～14世紀のSK2097から出土した。博多遺跡では第79次調査の536号遺構（13世紀後半）から破片が出土している。中世都市の鎌倉遺跡でほぼ完形品が、また草戸千軒遺跡で破片が出土しており、鎌倉遺跡から出土した物は鏡に弦巻を下げる止具とされる。250は鹿角製の装飾具である。鹿角の根元を鹿の頭骨から切り落とし、切断面に菊花文を線刻している。長径5.0cm、現状の重さ18.7gを測る。菊花文は径5mmの円を中心とし花弁は16枚を数える。花弁は中に掘り込みの有無があり、それぞれが3枚ずつ（図の左側だけ2枚ずつ）交互に並ぶ。菊花文の周囲には花弁に対応した線刻がある。縁にみられる小孔は血管孔等の自然の孔である。裏側は角を削って半球状に為し、その中に紐（もしくは棒）を通す穴（A）を開けている。またその穴Aに対し直交する形で図面左側にも長径1.6cmの穴（B）を穿つ。T字状の紐の繋ぎ目を飾ったり（略図）、Aに棒を通しBに楔を打込み、固定して使用する装飾具と思われる。13～14世紀のSK2057から出土した。

5)骨角器製造関連遺物（第25図251～267　254～267は他の調査現場出土品である）

骨角器の未製品が多数出土した。ほとんどは鹿角で、1点のみシカの中手骨である。251はシカの中足骨である。鋸を使用せず、先が尖ったもので両側面に削り目を入れてから割ろうとしている。260は62次で出土したシカの中足骨であるが251と同様に側面を削って割ろうとしている。笄等の素材であるが、鋸を使わないなど作業工程が分かる資料である。253はSE3205の井筒内から出土した。両端から素材を切り取っている。長軸に直交して鋸で切り目を入れた後、平行する面は鋸を使わずに割り取っている。切り残された部分も素材として使用できそうにもかかわらず廃棄している。253から取られた素材と同じ形のものが60次調査で出土した256で蒲鉾型を呈す。252は厚みが薄いものの蒲鉾型と同類の素材と思われる。14世紀の2056から出土した。254は125次調査出土で、切り取られた素材はやや長めの蒲鉾型を呈す。255は42次調査出土の鹿角で図では右側で蒲鉾型素材を切り取っているが、これ自身も下側を平らに整形しており、素材である可能性がある。これも軸に直交する面は鋸で切断しているが、平行する面は割っている。この他にも蒲鉾型素材を切り取った痕跡が残る鹿角は多く出土している。257～258は鹿角先端部である。257は両端を切り落とした後、半分に割るための切目を入れる途中で廃棄している。258も鹿角で両端を刃物で切断した後、細かく削っている。未製品か。259は95次調査で出土した。数点出土しているが、先端部を削っているが、骨角器として利用せず廃棄している。165次で出土した数点の鹿角先端の一部にも同様な削りがみられる。261･262は長方体の素材で断面は約1cmの方形で長さは5cmを超える。261は111次、262は115次で出土した。緻密質が厚いことから大型哺乳類の骨を使用している。263は95次調査（14～15世紀）で出土した板状素材である。ウシ･ウマの長骨を3.6×3.4cmの方形にして、両面の凹凸を刀子で削って平坦に成型している。265は大型鯨類の骨に切目を入れ、266にみられるような直方体に切り出している。267は鼈甲で未加工品と思われる。60次調査で出土した。これら骨角器関連遺物は博多濱と沖ノ濱の2つの砂丘の西側斜面に広く分布する。このうち鹿角を切り落とした痕跡があるシカの頭蓋骨は39次･115次など店屋町で多く出土する他（今回165次調査でも1点出土）、鼈甲の代わりに使用するために牛の角を切り取った痕跡を示す角芯（115次）と267の鼈甲未加工品が近接する調査区で出土しているなどある程度の集中がみられる様である。しかし1ヶ所で出土する素材や廃棄片の点数は少なく、比較的多く出土した95次、159次、165次の各調査地点でも調査区全体での出土点数が数点から十数点と少ないため1ヶ所で長期に活動した工房を想像するのは困難である。現時点では博多での骨角器製作については不明な点が多い。

6)動物遺存体　パンケースで約30箱と多数出土しているが、まだ同定が済んでおらず報告することがで

きない。出土状況としてはSK1008や2055などの廃棄土坑や溝、井戸から出土したほか、道路面上や整地層中からも多く出土している。今後同定を進めて成果を公表する機会を得たい。

7)石製品（第27図） 244は赤褐色を呈す石製の硯である。1114から出土した。近世か。245は滑石製の温石である。3503から出土した。246は滑石製品である。中央を窪ませた碇石のミニチュアか。重さ24.5ｇを測る。3388から出土した。13世紀後半～14世紀である。247は水晶製である。長さ2.6cm、重さ3.2ｇを測る。248は碧玉製の管玉である。古墳時代の須恵器等が若干であるが出土している。整地土と共に運ばれてきたものか。1009から出土した。

4. 小結

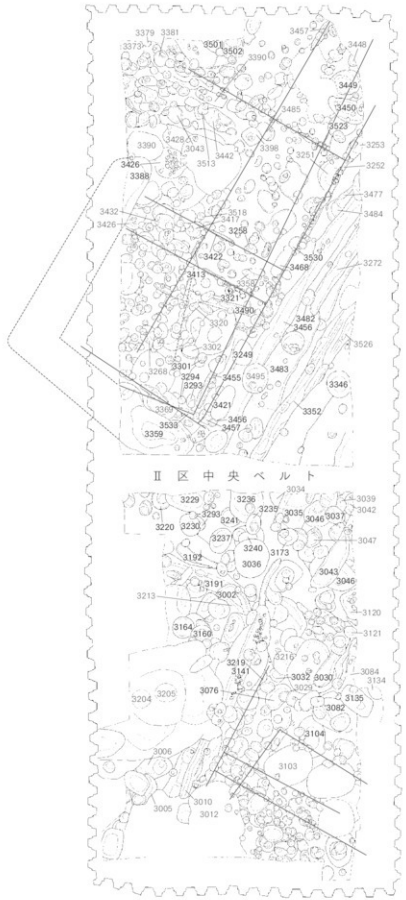
1)調査地点は沖ノ濱の西端に近い。周辺の78次や123次調査では12世紀後半の遺構が確認されている。今回遺物の分類等がまだ済んでおらず調査区内で12世紀中頃に属する遺構はまだ確認できていないが、底部に墨書がある白磁碗が12点出土（表1 P38）しており、中には11世紀後半から12世紀前半に遡るものもあるため、当時の港湾施設の存在が予想されている冷泉公園近辺だけではなく、沖ノ濱西側にも陶磁器等の荷揚げ、集積場所があったものと考えられる。

2)道路状遺構の時期　道路の築造時期に関しては道路の下で築造以前の土坑を数基確認した。土坑は径1.3～2.0mのものがあり、深さも52～87cmと深い。堆積はレンズ上を呈し、埋土に貝などを多く含むことから廃棄土坑であると思われるが、同安窯系青磁碗の破片が多く出土するなど、漁村的な雰囲気とは思えない。これらの土坑は12世紀後半と考えられるが、これらの土坑が埋没した直上に作られた道路面にも同安窯系青磁碗の破片が敷かれているため土坑埋没後道路が築造されるまでの期間は短く、13世紀前半には道路として使用され始めたと考えられる。

3)道路側溝　側溝は素堀りと考えられるが、Ⅱ区中央ベルトの観察からかなり南北に動いていたことがわかる。まず13世紀前半以降次第に北側に移動した後、14世紀頃中～後半頃また南側に戻る。道路幅は確認できたところでおおよそ3.5m程度であるが、井戸のところで説明したとおり、東端では道路を切るように井戸が掘られており、14世紀頃には道路が廃絶、もしくは幅の縮小化が起きていたと考えられる。ただ道路を切るSE2005が埋まった後その上で道路と思われる整地層が確認できたため、井戸廃絶後は再び、道路として使用されたことが分かる。道路側溝は2面では道路南側のみの確認で、北側では精査したにもかかわらず確認できなかった。ただ道路とその北側の敷地は整地の仕方が異なっており、それは検出時に土色の違いとして明確にとらえることができたことから、側溝はつねに両側に作られたのではなく片方にのみ作られる事もあったと思われる。南北道路は明確な側溝状遺構は確認できない。しかし第28図によるとすべての東西道路側溝がⅡ区中央ベルト下側で途切れる事から南北道路についても確実に存在したものと考えている。

4)道路硬化面　道路状遺構のうち東西方向の道路では路面硬化面を確認した。路面の硬化面は下層では1～5cmほどの間隔でみられ、最下層の厚さ25cmの間だけでも7面の路面を確認することができた。下層では同安窯系青磁片を主とするが、上層では小石や土器小片を敷いて路面としている。土層観察では道路面は黒褐色砂質土と黄褐色砂層白色砂の互層となっており、それぞれの厚さは1cm以下の細かな整地である。路面が汚水や有機物で汚れたら白色砂を敷いたものと思われ、白色砂の上面では雨などによって撹拌された痕跡などもみることができた。

5)道路の廃絶　道路は前述したように14世紀前後に井戸が作られるなど、廃絶・縮小した時期があると思われるが、SE2005が埋没したした後も道路状の整地が行われ、標高で4.0m、現地表面から70cm下までつづく。その上では堆積の仕方が全く異なり、東西方向の側溝もみられなくなり、現地割り方向に



第28図　第３面全体図

沿う土坑や溝が掘られるようになる。これは太閤町割りによる区画の変化によるものと考えられるため、道路廃絶の時期は近世初頭と考えられる。

6)町割り　今回沖ノ濱西端に12世紀末～13世紀初頭には東西道路が存在したことが判明した。道路の北側は東西道路に沿う溝状遺構（SD1137）や柱穴（SB02）があり、14～15世紀には道路に沿って柵もしくは小屋が建っていたと思われる。道路南側は中央ベルト土層によると14世紀前半には東西道路に沿って幅1.5m、深さ60cmほどの溝があり、溝の南側には小規模な礎石建物が建っていたことが判明した。礎石は径30cmほどの小さな石を使用しているため建物も小規模であったと思われるが、礎石上面から溝にかけて焼けており、火災によって消失した可能性がある。２面目では東西側溝のSD2191に沿う溝や土坑がみられ、道路南側敷地内では道路に沿って区割りをしている。３面目では道路に沿って土師皿出土土坑（SK3249・3369・3421・3468）や直交する小溝、連続する小穴がみられる（第28図）がこれらは、道路に沿った建物の基礎と思われる。小溝や柱列の主軸はいくつか異なる筋がみられ、溝と共に町割りの主軸も度々変化した様である。道路はSE2005が廃棄した15世紀以降も続くが、土層ではその上面で途切れながらも３面の焼土層を確認した。中世後半の博多は龍造寺や島津氏による焼き討ちを受けており、これらはその痕跡である可能性がある。

5．博多遺跡群第165次調査出土銭について

福岡市埋蔵文化財センター　　片多　雅樹

博多遺跡群第165次調査では220枚の銭が出土した。銭銘と枚数を表３に、遺構別の出土銭銘を表４に示す。PL ３、４には主要なものの透過X線写真、背字のある南宋銭などに関しては拓本を付した。腐蝕が著しく、従来の錆取りや透過X線写真での銭文判読が困難であったものに関しては、研ぎ出し註１）により銭銘を解読した。銭銘を解読できた（銭文4文字を限定できた）151枚のうち北宋銭が127枚と８割以上を占め、これは博多遺跡群では共通の様相といえる。南宋銭はずれも背字まで判読できたため、それぞれ鋳出された年が判明している。下部を欠失しているNo.127淳熙元寶の背下には文字が入らないか一から六まで可能性がある。鉄銭が2点出土しているが、いずれも腐蝕が著しく銭銘の解読にはいたっていない。No.216の天聖元寶は孔が意図的に丸く削られており、銭をなにかに転用したもののようである。

註１）片多雅樹2005「博多遺跡群第144次調査出土銭について」『博多104』福岡市埋蔵文化財調査報告書第850集　福岡市教育委員会

表3　出土銭一覧

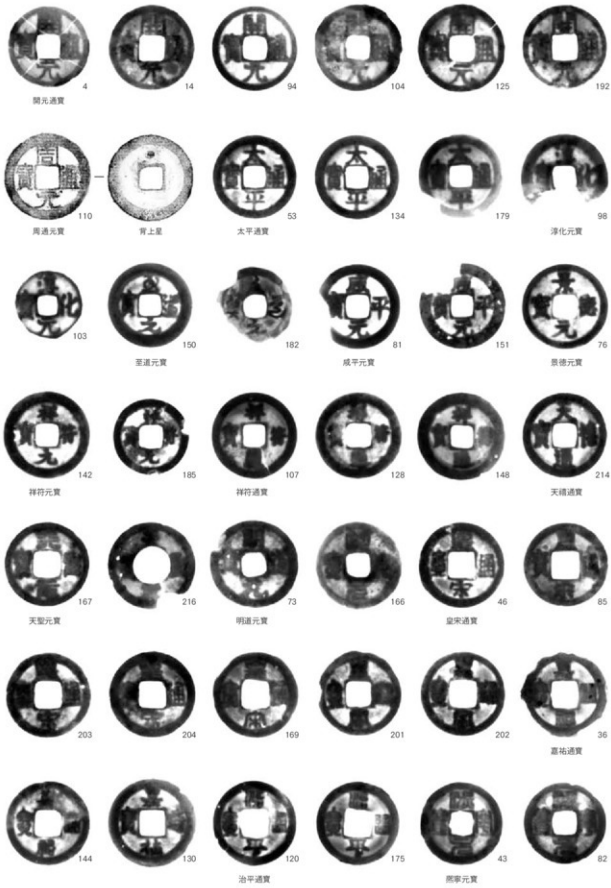
銭　銘	初鋳年	王　朝	枚数	銭　銘	初鋳年	王　朝	枚数	銭　銘	初鋳年	王　朝	枚数
開元通寶	621	唐	12	至和元寶	1054	北　宋	1	紹熙元寶	1190	南　宋	1
周通元寶	955	後　周	1	至和通寶	1054	北　宋	2	嘉泰通寶	1201	南　宋	1
太平通寶	977	北　宋	6	嘉祐通寶	1056	北　宋	4	開禧通寶	1205	南　宋	1
淳化元寶	990	北　宋	3	治平元寶	1064	北　宋	1	紹定通寶	1228	南　宋	1
至道元寶	995	北　宋	2	治平通寶	1064	北　宋	2	端平元寶	1234	南　宋	1
咸平元寶	998	北　宋	2	熙寧元寶	1068	北　宋	12	端平通寶	1234	南　宋	1
景徳元寶	1004	北　宋	2	元豊通寶	1078	北　宋	14	咸淳元寶	1265	南　宋	1
祥符元寶	1009	北　宋	3	元祐通寶	1086	北　宋	16	永樂通寶	1408	明	2
祥符通寶	1009	北　宋	7	紹聖元寶	1094	北　宋	6	寛永通寶		江　戸	1
天禧通寶	1017	北　宋	4	聖宋元寶	1101	北　宋	3	解読不能			19
天聖元寶	1023	北　宋	3	大観通寶	1107	北　宋	1	欠　損			50
明道元寶	1032	北　宋	2	政和通寶	1111	北　宋	5	計：220枚			
景祐元寶	1034	北　宋	2	宣和通寶	1119	北　宋	1				
皇宋通寶	1038	北　宋	23	淳熙元寶	1174	南　宋	1				

表4　遺跡別出土銭一覧

No.	出土遺構	銭　銘	備考	No.	出土遺構	銭　銘	備考
1	008	元豊通寶	折二､行書	32	1036	元豊通寶	
2	008	紹定通寶	背上四:1231年鋳造	33	1040	元豊通(寶)	3/4
3	1002	至和通寶		34	1057	政和(通)寶	3/4
4	1002	開元通寶		35	1063	□××××	1/4
5	1004	祥符通寶		36	1072	嘉祐通寶	
6	1009	祥××寶	2/4	37	1085	元祐通寶	
7	1012	□×××	1/4	38	1097	聖宋通寶	当三
8	1013	□□□□	模鋳銭か	39	1114	□××××	1/4
9	1013	皇宋通寶		40	1124	大観通寶	
10	1013	紹聖元寶		41	1124	(皇)宋(通)寶	2/4
11	1013	景徳元寶		42	1127	□□××	2/4
12	1013	政××寶	2/4	43	1133	熙寧元寶	孔ずれ
13	1013	□□××	2/4	44	1147	元豊通寶	折二､篆書
14	1013	開元通寶		45	1147	元祐通寶	
15	1013	皇宋通寶		46	1147	皇宋通寶	
16	1014	□□□□	不良銭	47	1147	紹聖元寶	
17	1014	開元通寶		48	1154	咸淳元寶	背上六：1270年鋳造
18	1014	元祐通寶		49	1155	開元通(寶)	3/4
19	1015	開元通寶		50	1155	嘉泰通寶	背上四：1204年鋳造
20	1016	太平通寶		51	SE2005 井筒	□×××	1/4
21	1024	元祐通寶		52	SE2005 掘方	元祐通寶	
22	1024	□□□□	小型	53	2014	太平通寶	
23	1024	祥符通寶		54	2014	□×通×	2/4
24	1024	景祐元寶		55	2030	大観通寶	
25	1024	□□元寶		56	2032	□□□□	小型
26	1024	開元通寶		57	2032	×通元寶	3/4､開元通寶か
27	1024	□□□□		58	2052	聖宋元寶	
28	1024	□□□×	3/4	59	2052	□□□□	
29	1032	××通寶	2/4	60	2052	景祐元寶	
30	1032	×□元×	2/4､通か	61	2052	開××寶	2/4
31	1032	□□□×	3/4	62	2052	××××寶	1/4

No.	出土遺構	銭　銘	備考
63	2052	□□××	2/4
64	2055	□□××	2/4
65	2057	紹聖元寳	
66	2057	元豊通寳	孔ずれ
67	2057	□通元寳	開元通寳か
68	2057	□□□□	不良銭、湾曲
69	2057	□×××	1/4
70	2057	□×××	1/4
71	2057 2面から80cm下げ	□□××	2/4
72	2057 掘方	元祐通寳	
73	2057 掘方	明道元寳	
74	2057 掘方	□□××	2/4
75	2097	×□元寳	3/4、開元通寳か
76	2099	景徳元寳	
77	2116	熙寧元寳	
78	2117	治(平)元寳	3/4
79	2120	皇宋通寳	星孔
80	2120	祥符通寳	
81	2127	咸平元寳	
82	2127	熙寧元寳	
83	2127	元祐通寳	
84	2135	熙寧元寳	
85	2148	皇宋通寳	
86	2178	元祐通寳	
87	2178	至和通寳	
88	2178	淳化元寳	
89	2178	政和通寳	
90	2178	×豊通×	2/4
91	2178	永樂通寳	
92	2187	政和通寳	
93	2187	□和××	2/4
94	2196?	開元通寳	
95	2202	熙寧元寳	
96	3009	□□□□	不良銭、小型
97	3036	太平通寳	
98	3076	淳化(元)寳	3/4
99	3117	開禧通寳	背上元:1205年鋳造
100	3133	元豊通寳	
101	3141	元豊通寳	
102	3141	□□□□	無文銭か
103	3141	淳化元寳	磨輪銭
104	3141	開元通寳	
105	3164	開元通寳	
106	3189	元豊通寳	
107	3215	祥符通寳	
108	3244	□□□□	小型
109	3336	××元×	1/4、開元通寳か
110	3347	周通元寳	背上星
111	3359	祥符元寳	
112	3450	紹聖元寳	
113	3458	洪×通×	2/4、洪武通寳か
114	3468	□□□□	鉄銭
115	3480	開××寳	2/4
116	3503	□平元寳	星孔
117	(制)区2-3面掘下げA土	嘉祐通寳	
118	(制)区2-3面掘下げA土	太平通寳	
119	(制)区2-3面掘下げA土	×通元寳	3/4、開元通寳か
120	(制)区2-3面掘下げA土	治平通寳	
121	(制)区2-3面掘下げA土	皇宋通寳	
122	(制)区2-3面掘下げA土	××元寳	2/4
123	(制)区2-3面掘下げA土	皇×××	1/4
124	(制)区2-3面掘下げA土	天禧通寳	
125	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	開元通寳	
126	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	元祐通寳	
127	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	淳熙(元)寳	3/4、背上十
128	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	祥符通寳	
129	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	景□□□	
130	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	嘉祐通寳	
131	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	皇宋通寳	
132	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	皇宋通寳	星孔
133	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	元祐通寳	
134	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	太平通寳	
135	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	皇宋通寳	
136	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	(皇)宋通寳	3/4
137	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	紹熙元寳	折二、背下二:1191年鋳造
138	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	熙寧元寳	3枚銹着
139	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	政和通寳	3枚銹着
140	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	元祐通寳	3枚銹着
141	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	聖宋元寳	3枚銹着
142	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	祥符元寳	3枚銹着
143	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	元祐通寳	3枚銹着
144	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	嘉祐通寳	2枚銹着
145	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	天禧通寳	2枚銹着
146	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	熙寧元寳	2枚銹着
147	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	天聖元寳	2枚銹着、孔ずれ
148	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	祥符通寳	
149	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	聖宋元寳	
150	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	至道元寳	
151	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	咸平元寳	
152	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	皇宋通寳	
153	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	□□××	2/4
154	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	皇××寳	2/4
155	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	×寧元×	2/4
156	Ⅰ区2-3面掘下げD土(黒褐色炭まじり土)	□×××	1/4
157	(制)区2面検	元祐通寳	
158	(制)区2面検	開××寳	2/4、背上月
159	(制)区2面検	元□通寳	
160	(制)区2面検	元豊通寳	
161	(制)区2面検	祥符通寳	
162	(制)区2面検	□□××	2/4
163	(制)区2面検	皇宋通寳	6枚銹着
164	(制)区2面検	熙寧元寳	6枚銹着
165	(制)区2面検	元祐通寳	6枚銹着
166	(制)区2面検	明道元寳	6枚銹着
167	(制)区2面検	天聖元寳	6枚銹着
168	(制)区2面検	紹聖元寳	6枚銹着
169	(制)区3面写真清掃	皇宋通寳	
170	(制)区遺構検	××元寳	2/4
171	(監)Ⅲ区2面北側清掃	熙寧元寳	
172	(監)Ⅲ区2面南側清掃	□□××	2/4
173	(監)区1-2面掘下げ	元豊通寳	
174	(監)区1-2面掘下げ	元豊通寳	
175	(監)区1-2面掘下げ	治平通寳	
176	(監)区1-2面掘下げ	熙寧元寳	
177	(監)区1-2面掘下げ	熙寧元寳	
178	(監)区1-2面掘下げ	元豊通寳	
179	(監)区1-2面掘下げ	太平通寳	
180	(監)区1-2面掘下げ	元祐通寳	
181	(監)区1-2面掘下げ	開元通寳	
182	(監)区1-2面掘下げ	至道元寳	
183	(監)区1-2面掘下げ	□×××	1/4
184	(監)区2面1段下げ	元祐通寳	
185	(監)区2-3面掘下げ	祥符元寳	
186	(監)区2面道路硬化面直上～5cm浮	景××寳	2/4
187	(監)区2面道路整地13後～14前か	□×××	1/4
188	(監)区南北ﾍﾞﾙﾄ上層13C～14C末	□□□□	
189	Ⅲ区2面廃土中	皇宋通寳	
190	Ⅲ区2面廃土	□通元寳	開元通寳か
191	Ⅲ区2面廃土	□□□×	3/4
192	Ⅲ区2-3面間包含層	開元通寳	
193	Ⅲ区2-3面間包含層	端平元寳	背上元:1234年鋳造
194	Ⅲ区2-3面間包含層	至和元寳	
195	Ⅲ区2-3面間包含層	皇宋通寳	
196	Ⅲ区2-3面間包含層	皇宋通寳	孔大
197	Ⅲ区2-3面間包含層	宣和通寳	
198	Ⅲ区2-3面間包含層	政××寳	2/4
199	Ⅲ区3面検	政和通寳	
200	Ⅲ区壁面	熙寧元寳	
201	1-2面掘り下げ	皇宋通寳	2枚銹着
202	1-2面掘り下げ	皇宋通寳	2枚銹着
203	1-2面掘下げ	皇宋通寳	湾曲
204	1ﾄﾚ	皇宋通寳	
205	1ﾄﾚ	祥××寳	2/4
206	1ﾄﾚ	×祐×寳	2/4
207	1ﾄﾚﾝﾁ	皇宋通寳	
208	54～57層(土壙)整地層下	×××寳	1/4
209	R1	元豊通寳	
210	R1	×××寳	1/4
211	東南隅整地層	紹聖元寳	
212	道路整地層	元豊通(寳)	3/4
213	表採	皇宋通寳	孔ずれ
214	表採	天禧通寳	
215	表採	嘉×××	1/4
216	表採	天聖元寳	円孔、銭転用？
217	不明	大××寳	2/4
218	北東ﾄﾚﾝﾁ	永樂通寳	
219	ﾗﾍﾞﾙなし	寛永通寳	
220	東南側土層59層土壙整地層下	□□□□	鉄銭、折二か

No.の太字は図を付したもの。□は判読不能、×は欠損、()は□または×だが限定できる。


4
14
94
104
125
192
開元通寶
110
53
134
179
98
周通元寶
背上星
太平通寶
淳化元寶
103
150
182
81
151
76
至道元寶
咸平元寶
景德元寶
142
185
107
128
148
214
祥符元寶
祥符通寶
天禧通寶
167
216
73
166
46
85
天聖元寶
明道元寶
皇宋通寶
203
204
169
201
202
36
嘉祐通寶
144
130
120
175
43
82
治平通寶
熙寧元寶

PL.4

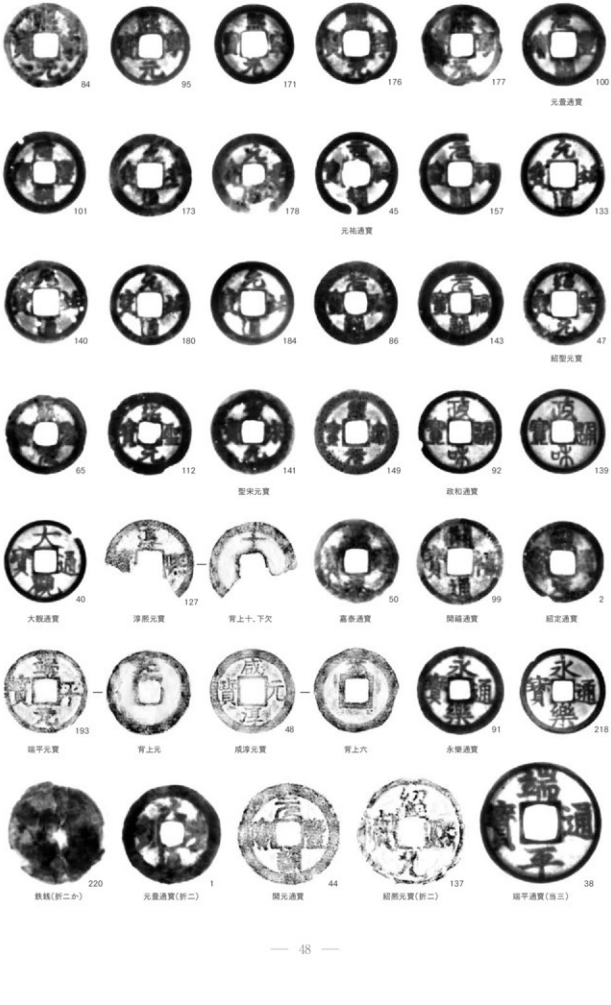
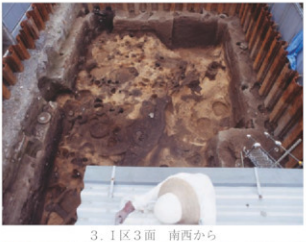

84
95
171
176
177
100
元豊通寶
101
173
178
45
157
133
元祐通寶
140
180
184
86
143
47
紹聖元寶
65
112
141
149
92
139
聖宋元寶
政和通寶
40
127
50
99
2
大観通寶
淳熙元寶
宣上十、下欠
嘉泰通寶
開禧通寶
紹定通寶
193
48
91
218
端平元寶
宣上元
咸淳元寶
宣上六
永樂通寶
220
1
44
137
38
鉄銭(折二か)
元豊通寶(折二)
開元通寶
紹熙元寶(折二)
端平通寶(当三)

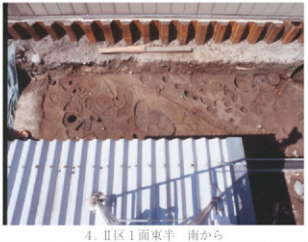
図　　版

１．Ⅰ区１面　南西から

２．Ⅰ区２面　南西から



３．Ⅰ区３面　南西から



４．Ⅱ区１面東半　南から

５．Ⅱ区２面　南から

６．Ⅱ区３面　南から

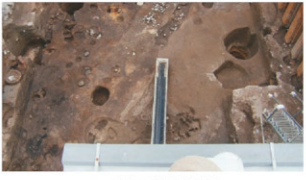
７．Ⅱ・Ⅲ区２面南側　東から

８．Ⅰ区３面　南西から

図版２

1．SD1004　西から

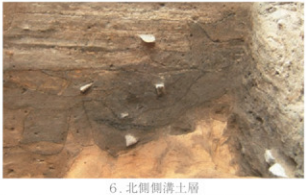
2．SD1098　東南から



3．Ⅰ区２面溝検出状況

4．SD2191　北東から

5．SD3141　東から



6．北側側溝土層

7．SD3456・3272・3252　北から

１．Ⅲ区３面北側　西から

２．Ⅲ区道路に直交する小溝と柱穴群

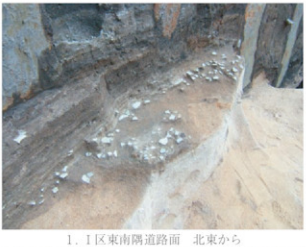
３．SD3490　南から

４．SD3352　東から

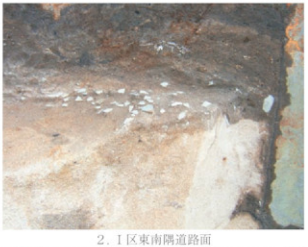
図版４

１．Ⅱ区２面路面Ａ　東から

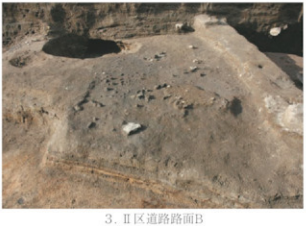
２．Ⅱ区２面路面Ａ　南から



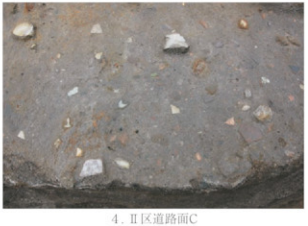
１．Ⅰ区東南隅道路面　北東から



２．Ⅰ区東南隅道路面



３．Ⅱ区道路路面B



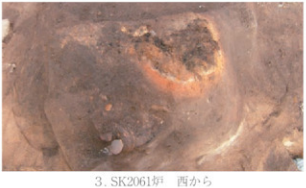
４．Ⅱ区道路面C

５．3483遺物出土状況

図版６

1．SK3449　南東から

2．SK2035･2036　南西から

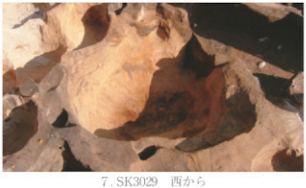


3．SK2061炉　西から

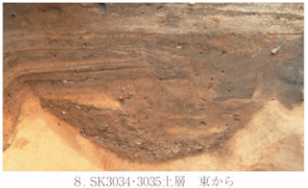
4．SK2097　東から

5．SK2187　南東から

6．SK2187･2097土層



7．SK3029　西から

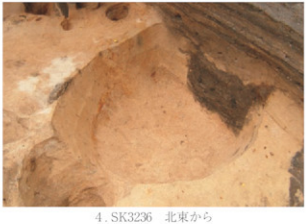


8．SK3034･3035土層　東から

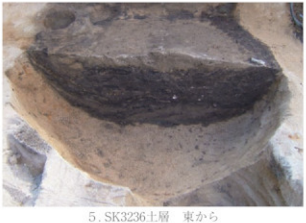
１．SK3036土層　北から

２．SK3103　南西から

３．SK3135　東から



４．SK3236　北東から



５．SK3236土層　東から

６．SK3251　南から

７．SK3251土層　南から

８．SK3345土層　東から

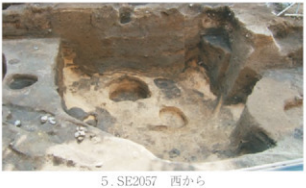
図版８

1．SK3426　北から

2．SK3427　東から

3．SE2005　南から

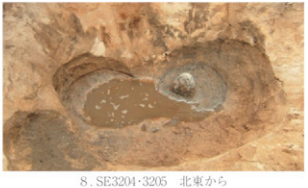
4．SE2052



5．SE2057　西から

6．SE2052　検出状況

7．SE3012　東から



8．SE3204・3205　北東から

1．SK3249　北から

2．SK3359　北東から

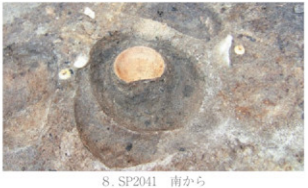
3．SK3388　西から

4．SK3390　南から

5．SK3421　北から

6．SK3468　北から

7．SP2018　西から

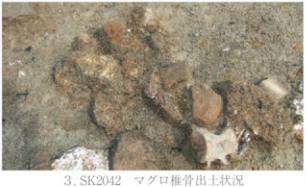


8．SP2041　南から

図版10

1．SK1008　アカニシ・アワビ出土状況

2．SK1008　鯨類上腕骨出土状況



3．SK2042　マグロ椎骨出土状況

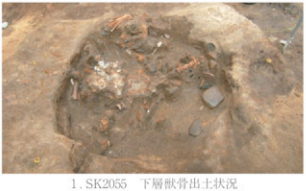
4．SK3036　イノシシ頭骨吻部

5．SK2124　南西から

6．SK2051　大型魚骨出土状況

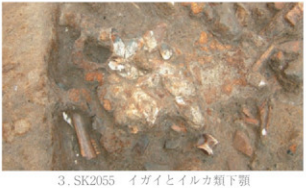
7．SK2043　遺物出土状況

8．SK2043　アワビ出土状況



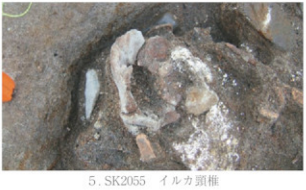
1．SK2055　下層獣骨出土状況

2．SK2055　アワビ・イヌ頭骨

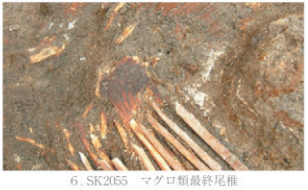


3．SK2055　イガイとイルカ類下顎

4．SK2055　イルカ類椎骨出土状況



5．SK2055　イルカ頭椎



6．SK2055　マグロ類最終尾椎

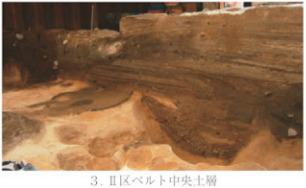
7．SK2055　マグロ類尾鰭

8．SK2055　小型魚類骨出土状況

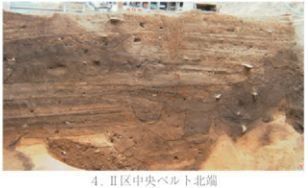
図版12

1．Ⅰ区南壁土層

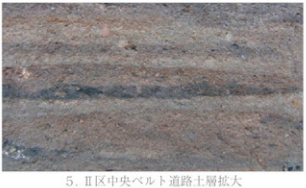
2．Ⅰ区東壁土層



3．Ⅱ区ベルト中央土層

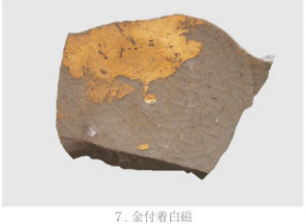


4．Ⅱ区中央ベルト北端



5．Ⅱ区中央ベルト道路土層拡大

6．Ⅱ区中央ベルト南側



7．金付着白磁

8．大型魚類歯骨

報告書抄録

書　　名	博　多　１２３
副 書 名	博多遺跡群第１６５次調査報告
巻　　次	１２３
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	９９３集
編 集 著 者	屋山洋　　編集機関　福岡市教育委員会　　発行機関　福岡市教育委員会
発行年月日	2008年3月31日
郵 便 番 号	８１０－８６２１　　住　所　福岡市中央区天神１丁目８番１号
電 話 番 号	０９２－７１１－４６６７
所収遺跡名	博多遺跡群第165次 ふくおかけんふくおかしはかたくこもんどまち
所 在 地	福岡県福岡市博多区古門戸町５０、５１、５２番
コ ー ド	市町村　４０１３１　　遺跡番号　０２０１２１
北　　緯	３３°３５′３６″　　東　　経　１３０°２４′２３″
調 査 期 間	２００６０９０７～２００６１２１８　　調査面積　３９２㎡
調 査 原 因	共同住宅の建設　　種別　集落　　主な時代　中世～近世
主 な 遺 構	井戸　7基　　土坑多数　　溝　　柱穴多数　整地層
主 な 遺 物	陶磁器　土師器　滑石製品　土錘　鉄製品　銅銭　骨角器　動物遺存体
特 記 事 項	東西方向の道路とそれに沿った町割りを確認することができた

福岡市埋蔵文化財調査報告書993集

博　多　123

―博多遺跡群第165次調査報告―

2008年（平成20年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印　刷　株式会社西日本新聞印刷
福岡市博多区吉塚8-2-15